
ますむら・ひろし
ATAGOUL is Cat's Forest
アタゴオルは猫の森
3
MFコミックス
フラッパーシリーズ
アタゴオルは猫の森
3
ますむら・ひろし
MEDIA FACTORY
MFコミックス
ISBN4-8401-0419-0
C9979 ¥514E
9784840104197
1929979005146
定価：本体514円（税別）
雑誌52641-19
メディアファクトリー
MEDIA FACTORY
アタゴオルにそびえる鳥霧山に噴火の前兆が!!
みんなの不安を尻目にひとり浮かれるヒデヨシ、
そこに噴火の日時を予知する少年が現れた!!
『噴キマンジュウ』、人々を襲う謎の病気、
その名も"突発性ヒデヨシ病"の発生源は
ヒデヨシではないのか?『境目』、
テマリちゃんが悩んでいる
気晴らしに出かけた
マント屋で
ヒデヨシが買った
凄いマントとは……
『風ノ中ニ居マス』
など8編と、
作者による解説
『アタゴオル余波3』を
お届けします。



ますむら・ひろし

昭和27年生まれ
山形県出身。
昭和48年デビュー作『霧にむせぶ夜』が
『週刊少年ジャンプ』に掲載。
その後青林堂に入り
雑誌『ガロ』を舞台に活躍、独立後現在に至る。
平成9年には『アタゴオル玉手箱』で
日本漫画家協会賞大賞受賞。
宮沢賢治作品の漫画化にも意欲的に取り組み、
独自の感性で大胆に視覚化している。
中でも『銀河鉄道の夜』は
昭和60年、劇場アニメとして公開、
マンガファンだけでなく
宮沢賢治愛好家の間でも高い評価を得ていて、
平成13年には一連の研究に対して
イーハトーブ賞を受賞する。

装画・ますむら・ひろし
装幀・多田和博＋岡田ひとみ
フォーマットデザイン・フィールドワーク

ATAGOUL is Cat's Forest

アタゴオルは猫の森 ③

ますむら・ひろし



アタゴオルは猫の森 ③

ATAGOUL is Cat's Forest

第一話　噴キマショウ





うぐぐっ
テンプラッ
ヒデテン温泉を
見すてる気かっ
こんな
煮立ってる湯に
入れないよ
面の皮が厚いのは
知っていたが
おまえは全身
厚いんだな
フーッ
いい湯だわっ
ら
酒飲んで
ないのに
酔ってるぞ
これ
地震だよ
地震が
ひんぱんに起こるし


湯は沸騰するし
これは前ぶれかも知れないぞ
いかにも
鳥霧山の噴火の前兆現象と考えられる
見たまえ
山頂周辺の地震計だが
回数が増えている…
このままでは噴火が……
キャーッ
早く噴火しろいっ
バカ者が


おまえだろう前に噴火杖で鳥霧山を爆発させようとした奴は
違いまーすアレはスミレ博士です
そーだあの杖で
さっさと噴火させようぜ
そんなことになったらアタゴオルは焼け野原なんだぞ
死ななきゃいーべよ
パンツあの杖は?
オレがしっかり隠しておいた
どっちみち噴くんでしょ
ねっねっいつ噴くの?
ヒデヨシ噴火を予測するのはムリだよ
ムリ?
こんなに器機あっても分かんないのかよォ
ああ噴火の予測は不可能なんだ


明日の夕方に噴火するぞ
んっ
また来たな
おまえいい加減な事を言うなっ
明日になれば分かるよ
そんなことより「噴火杖」どこにあるか知らないかい？
おっ君
君もあの杖捜してるのかっ
どうしてあの杖の行方が知りたいんだい？
さってはおまえ明日の夕方に杖を使う気だな
君らと話してもムダだな
失礼する
らっ
ドン
ドン


森のみなさん
鳥霧山が明日の
夕方に噴火します
ドン
ドン
とっとと逃げて
下さーーい
魚屋さんは特に
逃げてね
ウドン屋さんは
ウドン10杯作ってから
逃げましょーっ
噴火でウドン
つーるつる
おまえこそ どっかへ行け
食い逃げ男の方が
噴火より恐ろしいぜ



コラ
ウドン作って逃げないと死ぬぞ
誰がおまえの話など信じるかよっ
信じない者は火山灰に埋まります
テマリーッ噴火杖貸せーっ
アンタが勝手に持って行ったっきりでしょう
早く返してよっ
くっそーっ どこに行ったんだ噴火杖
テマリのインチキ占いじゃ当たんないしよーっ
ボン
うるさいわね近所迷惑だからどっかに行ってよ
どこへ行ったの噴火杖
フンカ・フンカ
杖・杖


いい気なもんだな
250年ぶりの〜っ大噴火だよ〜っ
ドーン
250年なんて鳥霧山にとってはつかの間の時間だろうな……
ああ……でも破壊力は相当溜まっているぞ
それにしてもさっきの子供不思議な奴だったなあ
うん明日の夕方噴火するなんて……
やけに自信たっぷりだったな
さーさーみなさん逃げましょー
噴火なのよーっ
ドーン


らっ
フフッ 君って森の住民に 信用されてないねえ
ほほほ 信用なんて どーでも いいのよ
あの杖見つけて 噴火させれば いいんだから
おまえも そーなんだろ
違いますよ
ボ
そんなら どーして 明日の夕方 噴火するなんて 言ったのさ
僕には 地中の熔岩の 流れが見えるん です
なんだとっ
オレ ヒデヨシだけど おまえなんつーの?


ジャリアから来た
時王です
よーし
時王
いっしょに
杖捜して
大噴火
させようぜ
えっ
何考えてんだ
コイツ……
分かりました
いっしょに
捜しましょう
よーっ時王
赤い点々の石なんか
探してどーすんのさ
へへへ
見っけ
ん？


なんだ
コレ？
千眼石だよ
さあ……噴火杖の事を
ただ想ってみて下さい
……
あっ


ちょっとォ
何考えてんですかっ
熔岩で焼きダコを
ちゃんと真剣に杖を想って下さい
へいへい
ら
こんな所に
ここはどこですか?
ここはなんと
モンモー!
うわっ
眠り花粉……
子供はおねむの時間だべーっ
あれ


どうしたんだ
こんな所で
おい
どうしたんだ？
ヒデヨシ君に
眠り花粉
かけられた
えっ
何か
盗まれたのか？
噴火杖の
場所を……
なんだって!?
いえ〜っ
オレの家の
こんな所に
隠してあった
とはよお
翌日
噴きます噴きます
今日は
噴火の日っ


また地震だ
こりゃあ本当に噴火するかも知れんぞ
断固噴かせますっ
見つけたぞ
ヒヂヨシ君 眠り花粉なんか使って卑怯だぞ
あら 起きたの時王ちゃん
その杖を僕に渡せ
噴火を食い止められるのは僕しかいないんだ
食い止めなくていーのよォ
噴きたいよーに噴かすのよーっ
ウドン100杯 紅マグロ50匹でどーです
にゃ
おまえ……金持ちのお坊っちゃまなのか

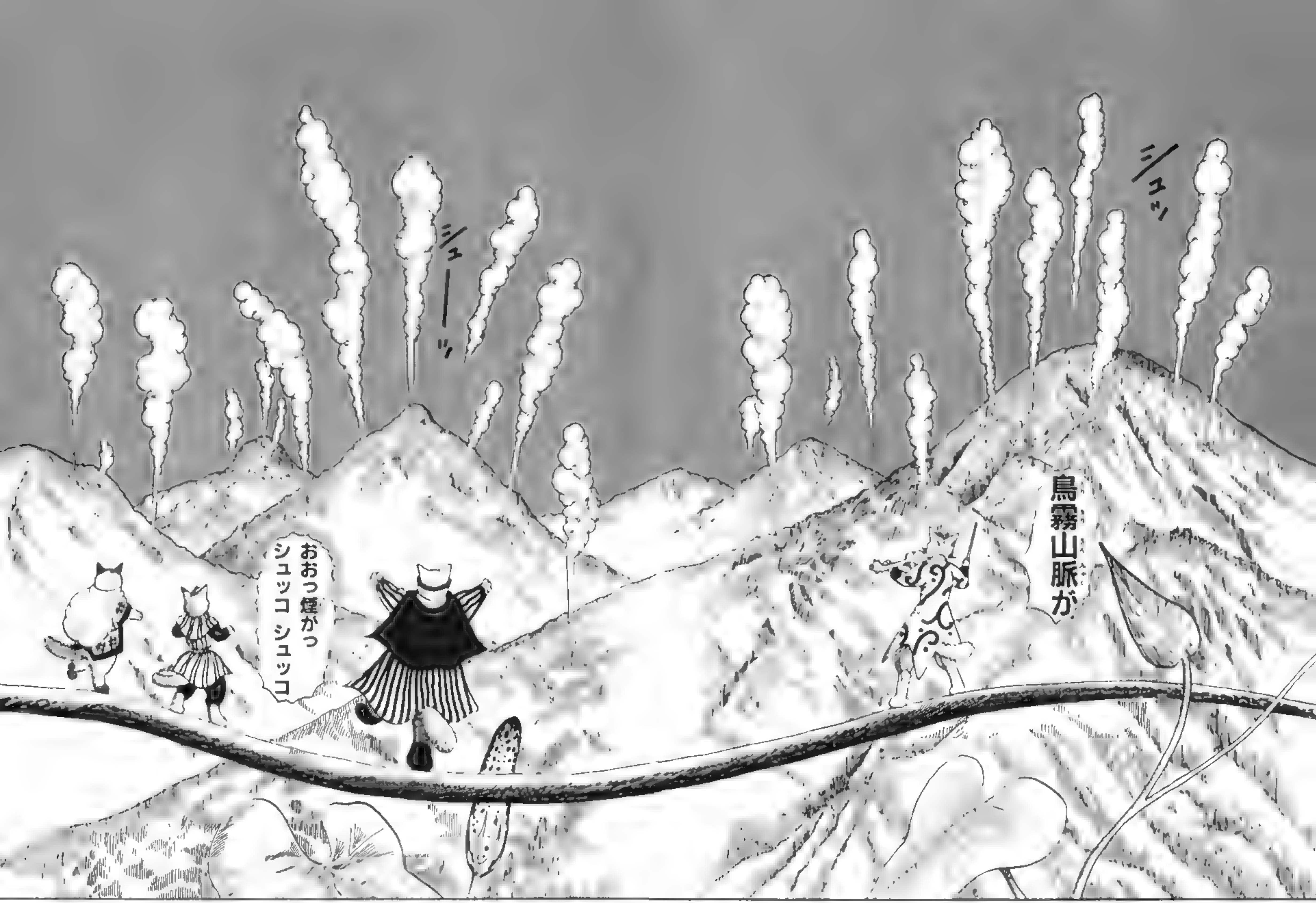

銀の鉱脈を持ってるからネ
よーし約束だぞ
僕は守りますよ
凄い……
鉱物製の宝だ
おっ
ぐら
これはいそがないと
シュ
シュッ
らっ
杖がバイオリンに


この森で一番のバイオリン弾きは？
ワシじゃスミレ楽師じゃ
おまえいそがしい時に
そりゃあ鷹あげ丸さんだよ
その方をぜひここへ僕は作曲しますので
ん？
ホッホッホッ君もまだまだ子供よのう
どうしてですか
君のやってることは作曲じゃなくてね


お絵描きつーのよ
付け髭なんかして「スミレ楽師じゃ」もまだまだ子供よのう
にゃ
あれっ親方
みなさん早く逃げましょう
鳥霧山が噴火するって火山局が言ってるんですよ
ですからバイオリンで噴火を食い止めようとしてるのです
楽器で噴火が止まるわけがないですよ
うっ
素晴らしい


ひひひ弾きたい
初めまして 時王と いいます
これ譜面です
おんや
くり返し 弾いて下さい
ほう
なかなか
鉱物製なのに なんとも艶く 伸びる音色
こつけな 楽器に 負けないぞ


ドカーンと噴いてみろ鳥霧山
あっ
ああ
ゴゴゴ
膨らんで来た 山体崩壊するぞ
ヒイ
唐あげ丸さん弾くのをやめないで
あっ
なんだコレ!!


シュッ
鳥霧山脈が
シュ——ッ
おおっ煙がっ
シュッコ シュッコ



キャーッ山脈の大噴火なのねーっ
これ……破壊力が分散したんじゃないか
おっ水蒸気が
シュッシュッと音階をたてて……
シュ
シュ
シュ
凄い
オオッすばらしい
シュ
ミ
水蒸気の噴気孔たちが
旋律を!!


そうか この譜面の 音符!!
山並みに あいた 噴気孔の 位置だ
おおっ それで山の絵なんか 描いてたのくぁ
ヤルじゃないか 時王君 ワシの弟子に ならんかね
いいでしょう
くーっ
しっかし この水蒸気音楽 聴いていると ワックワクするなあ
ああ
わくわくするのは 当然さ
なんたって オレたちを包み こんでいるこの星の


「生きてる」って
声なんだから

第二話　雲(くも)の雲母(うんも)




ぐびーっ
ぐびーっ
やかましいなあ……
酒ばっかり飲んでそうじしないし
あちこちの看板は盗んでくるし
んが？


どうしたの時王?
ここは環境が悪いです
あれ
うっこら うっこら
あとは耳歯石です
あったっ コレコレ
ヒデヨシが岩背負ってる


すごっ
カッコいーっ
時王の家ーっ
おお
時王凄いじゃないか
見事です
へへっ
どうも
さあ
約束よっ
オレにも
今の技教えてくれい


いいですが
すごく
むずかしい
ですよ
やりたい
やりたい
では
みなさん
僕の家へ
まるで
鉱物の一部に
なった気分だな
ああ
君は鉱物の力を
引き出す能力があるんだね
まあね
能力
欲しい欲しい
じゃ
ざくろ石で
やってみよう



「エ・ニャ・フェ・ミィ・グ」言ってみたまえ
エ…ニャ…フェミィグ
よろしいそれを
いっぺんに言うんだ
いっぺんに?
ああ5つの言葉を1音で言うのさ
そんなことできるのか?
するとこうなる
パキ
パキ
パ
キ
おお
いいねえやりましょう



特殊な発声法だな
簡単にはできないぞ
できるわよ
エニャヘミイグ
エニャフェミイグ
あれ…… この欠けているのはなんなのだ？
この形からすると
背霰石ですね
セアラレ石？
ええ 不思議な石ですよ
たぶん この辺にあったものを誰かが持って行ったのです ……誰だろう……？
3日後
エニャホミゲェ
貴方は何をしてもいいですがどうして僕が


こんなかっこうするんですか
道をきわめるには
まず形からじゃよ
君はヒデヨシ君そして
僕が時王なのよォ
くっすおお
ネズミ・トランプなんかするんじゃなかった
大負けして「なんでも言うこときます10日間」だもんなあ
エニャフェミイク
いくらやっても無理ですよ
もーあきらめましょう
ヒデヨシやスミレ博士はあきらめ早いけど
僕は時王けっしてあきらめないぞーっ


くぬぬ
こんなオトナにはなりたくない
エニャホミゲエ
ぐ
おっ
僕時王おなかすいたあ
またですか
あれ
ここも「ヒデヨシ君お断り」だよ
だいじょうぶ
僕は時王ちゃん


ハーイ
鰻丼大盛り3つ 並1つね
う
食いにげ男
とっとと帰れっ
お客に向かって無礼であるぞ
おじさん 僕が前金ではらいます
情けない奴め
子供にたかっているのか
お説教より鰻丼早くなっ
んめっ
ご飯も手づかみで食うんですか
美食家は口と手で味わうのよ


ふう
んまかった
エニャヘミグ
さっ
あっドロボウ
なんであんなことを
くくくっ盗んだものは味がちがうわあ
……情けない
しっかしあの呪文役に立ったなー
なっ君
あんな男とつき合うのやめなさい
はあ
馬鹿声出るようになったからな
ホントにつき合うのやめようかな


そのドンブリ返さないんですか
戦利品なのじゃ
ワシんちでお茶飲んでいくべ
ら
ほほうテンプラ君空き巣かね
ガラガラ
何言ってんだよ
おまえ おととい オレんちに来た時 青い本持ってってたろ
らっ
読めないのに イタズラ すんなよな


しかし あちこちのドンブリがあ[redacted]なあ
これなんか3年前につぶれた尾流ソバ屋のじゃないか
うわっ
それは!?
時王 どうかしたのか
これは凄い
そーなのよ 凄いシブトイ親父だったのよーっ
食いにげするとシツコクってさ
しみじみ
でも最後は奴が夜逃げしたがのう
このドンブリもっとありますか?
ずいぶんあるなあ


このドンブリ
しぶとくて
割れないのよ
そうでしょう
実に貴重な
「背霰石」で
できているのです
背霰石?
いいですか
……おお


これが背霰石
すばらしい……ふふふ
あった
この鯨鉱を背霰石に近づけるとね
シューーッ
シュー!!
おおっ
もくもくキラキラ


火山みたいだッ
不思議な匂いだな
鉱物が作る匂いです たっぷり吸って下さい
匂いったって……なんも感じないがのう
ええ
あの ソバ屋の ドンブリが？


そうなんです
それが
鮮麗石
だったんです
時王の家の
あのポッカリと
あいていた部分の
岩がねえ
まあ　オレが
食いにげしていた
おかげなのよーっ
それで
その石の
匂いって
どんな感じ
なんですか
なんと言ったら
いいか……
なんの
匂いもしないのよ
あれ……
胸が
ドクン
ドクンする
んっ
オレも
するぞ
あっ


う
なんだ コレは？
ふふ
恐竜雲母 あの匂いを吸ったせいです
恐竜雲母!?
頭が チクチク するっ


うっ
消え ちまった
そうなのだ
あの日以来
それは とつぜん やってくるのだ
ひょうたんを 叩いている時や
空っぽに なった 酒びんの向こうから
おっ
そうか……
今日はオレが



初めて
ヒデヨシと
会った日なんだ


おっテンプラにも来たのね
オレには朝来たぜ
あっ
ちっちゃいヒデヨシ君が木に縛られてるそばにいるのは!?
昔のオレだよ
今日は初めてヒデヨシに会った日さ
へえっ今日がっ
ああ
駄菓子屋で万引きして木に縛られてたんだ



さっぱり憶えてないなあ……
オレが縄をはずしてやったらおまえ
オレを縛って逃げたんだぜ
昔から最低だったんですねえ
記憶にございません
僕にも来たけどね何も映ってないんだ
君 オレより憶え悪いんじゃないの?
違いますっ!! 僕はまだ若いからです
…生きてるってことは


365枚の記念日を見つけることなんだ……

第三話　境目





ぐーっぐーっ
オレたちゃ欠食
ドラネコ団
ぐーっ
イチゴの
匂いがプンプン
春ですねえ
ん？
イエ～ッ
春なのよおっ
イエッイエッ
やめて下さいよ
馬鹿ヒデヨシの
マネなんか


イエーッ さいこーよっ
わっ カツラまでっ
あっ
イエーッ 酢ダコーッ 食いてーっ
イエーッ 最高なのよーっ
イエッイエッ
あれ…… これって!
ああ
突発性ヒデヨシ病
わははは


かかりたくないよなあ
最後は裸踊りだもんな
えーーっドラネコ団がヒデヨシ病に
原因不明の春の病気か
ツキミちゃん原因不明じゃないよ
絶対にヒデヨシ
ヒデヨシが原因なのよっ
テマリちゃん相当怒ってますなあ



去年ヒデヨシ病にかかって
あやうく腰の葉つけて踊るところだったからなあ
しかし不思議よね
いつもヒデヨシと一緒にいる貴方たちがかからないのが
アイツが保菌者じゃないってことだろう
まあ伝染性もないから助かるが……
ところでかんじんのヒデヨシはどうしたの？
最近ピタッと
不思議だね
3日後
あらら



イエーーッ
飛べーっ 紅マグローッ 最高なのよーっ
かわいそうに…… 石尾魚屋 ヒデヨシ病か
ホホホ
タダ なのよーっ
ワーッ いいのーっ もらっちゃうよ
魚屋が 狂ったぞーっ タコくれーっ
あっ
うーす
飛ぶ飛ぶ 酢ダコちゃん



魚屋がヒデヨシ病になったんだよ
オレには関係ないもんね
絶対にある
アンタ最近どこに行ってるの？
憶えてませんな
水占いで当ててみればあ
ホッホッホッ
ムムッ
その太い尻っぽ絶対つかまえてやる
3日後
…確かに……どう見ても変なんだ


あいつが前金はらって団子食うなんて
金持ってるってことだな
へいへいひーひー
いったいどこまで行く気なんだ
フッ
つけられているな
あれ……服屋に入ったぞ
んっ


なんだ
アリャ
変装したつもり……じゃないか
趣味悪ーっ
もう誰も
オレだと判るまい
その日の夕方
なあ……このあたり


ああ 冥蘭谷
冥蘭谷ってことは……
この雄しべが？
ああ
死者の魂が宿っているという……
こんな墓場みたいな場所に アイツ平気で行くよなあ
あーら


先生ーっ お待ちしてましたよーっ
ハーイ
さっ いつもの調子でヨロシク
アムッと
ジャリッ
酢ダコの口びるを
ジャガゴウ
がじりつくせばヌンワリとおお


汁がっ汁がっ
汁がグワッとォ
なにやってんだ
あの馬鹿
口から
出まかせで
弦は狂った
ままだし
冥蘭に
いやがらせを
してるとしか
思えんな
ニッチャラ
クーッチャラ
飲みこまず
噛むのよ〜っ
あ
雄しべの
先から
なにかがっ



花粉か？
ホホ
素晴らしい
チョッと
貴方たち なにやってんのよ
らっ テマリ
花が怒ってるじゃない 唄の拷問 やめなさいっ
お嬢さん
花は 怒っているの ではありません
そーよ 感動して るのよ
実は せせら笑って いるのです



せせら笑ってる?
フヌケた唄を聞くと輝き花粉を吹くのです
フヌケた唄
この花粉が貴重な漢方薬になるんだよ
フヌケた唄イッ…イッ
イエ〜ッフヌケッ
あっ
酢ダコくれーっ
テマリちゃんがヒデヨシ病に
ワハハハ天罰なのよ
踊り狂いなさーい

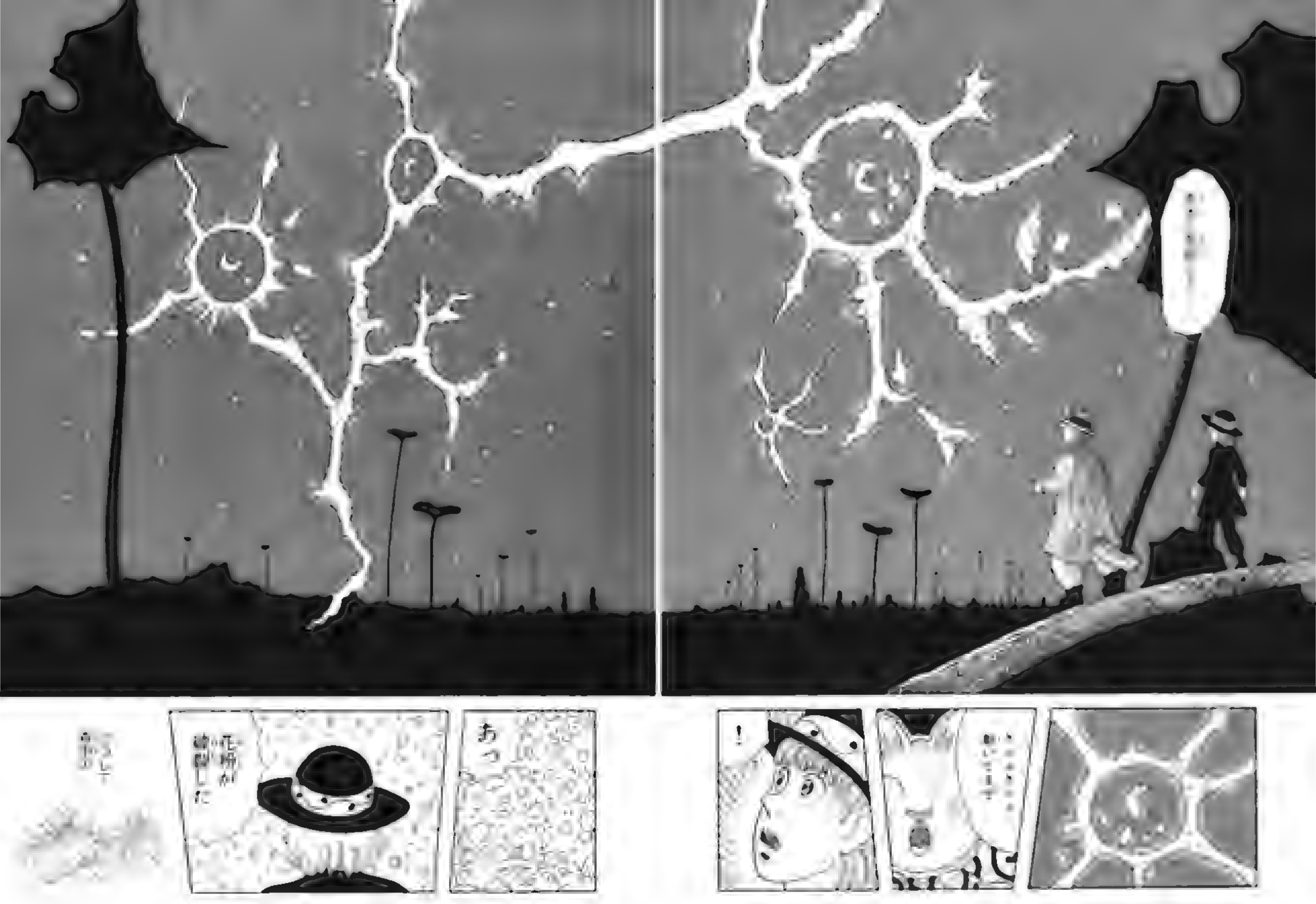

この症状の原因は
その花に関係があるのかい?
ウニイカタコタコ
いかにも…
この花には死者たちが宿っていると言われている…
花が笑うと この星型花粉と少しだけ透明な花粉が吹くんだが
その透明な花粉が原因なのさ
あっ
ヒデヨシなにやってんだ
花がせせら笑ってるだとォ
フヌケた唄だとォ


酢ダコちゅうイエーイエイエ
イエ〜〜〜〜ッ
墨吹いてえ
偉そうなイエイエ
足と海なっつ
魚魚酢ダコ離地
饅頭飲んで
カンベン版
おいヤメロ
これ以上
笑わせるな
酔ダコ
イエッ

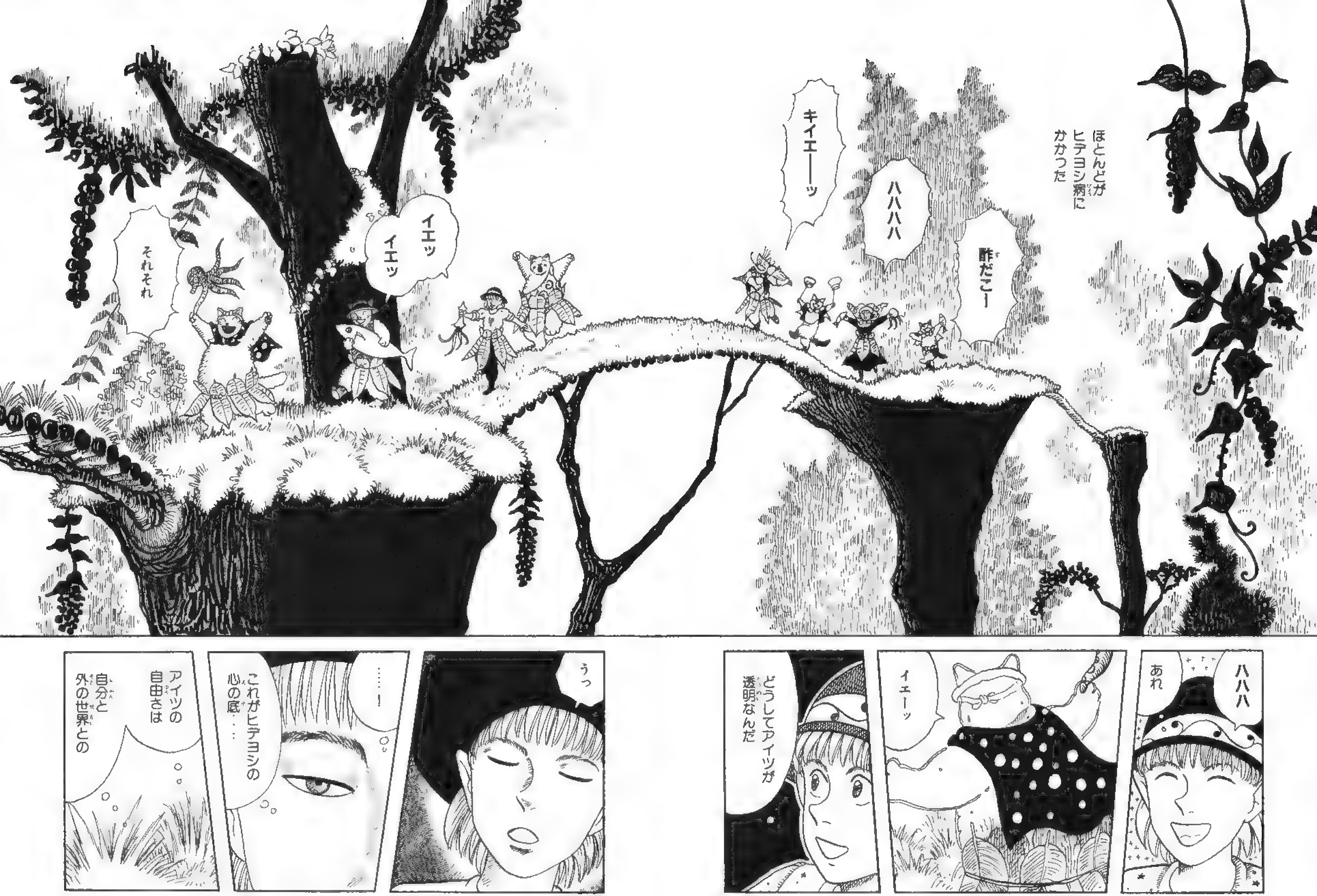


シュウウ
ら
ぶっ切れた
ぶっ切れた？
うわっ他の花まで
シューーッ
4日後
月が昇って来たぞ
なんともないな……


ねっアイツの言ったことはウソなのよ
なに言ってんの
ヒデヨシ病の原因の花粉がドバッと噴いたんだよ
…しかしもう
あれから4日だろ……
確かに大量に噴いたわりにはヒデヨシ病にかかった奴いないしなあ
うっ
ら
これか…花粉が



!
あっ
花粉が破裂した



ほとんどが
ヒテヨシ病に
かかつた
酢だこー
ハハハハ
キイエーーッ
イエッ
イエッ
それそれ
ハハハ
あれ
イエーッ
どうしてアイツが
透明なんだ
うっ
……!
これがヒテヨシの
心の底・・・
アイツの
自由さは
自分と
外の世界との


境目が無いんだ

第四話　留マッテハ・ナラナイ




雨はゆれて鳥霧のーっ
らっ
イエーッ乗り乗り
むんむがっ
うっ
タッ
タッ
タッ
タッ
悲しみの浮かぶっ
キャッホー
タッ
タッ


ちょっと
おまえねえ
イエーッ
あっ
バリ
なにやってんのよ
ギター入れ
壊してっ
おーーっ
べんしょーしまーす
えっ弁償する?
あのよ
オレ箱屋で
働いてんのよ
箱屋で
働いてる?


タン
タタ
アタゴオルに
箱屋なんて
あったかなあ
あったのよォ
ろーどー
してんのよォ
ホラ
ここなのさ
おーい親父
客だぞーっ
んっ


ハーイ
お客さん いらっしゃーい
なにこいつ
帰りたく なつた
あのよォ
こいつテンプラ つーんだけど
このギターの 箱 作ってほしい のよ
タダで
タダは ダメです アンタの日給から 棒引きです
らっ
さーて



おっ始めっかー
おーしっ
う
上手い


ヒデヨシも上手いけどあの親父も相当の腕だ
類は友を呼ぶのね
あっ
ギターが包まれていく
いーなあ
それーっ
軽くて堅くて
見事です


ヒデヨシ君
私のバイオリン入れもふんづけて壊して下さい
ぐえっ
ぐるじ〜
親方 壊さなくても頼めますよ
うっ
そーか
知らねよ
しかし おかしな親父だったぞ
ヒデヨシ そいつの名前なんというの?



ヒョータンの服を着て胸に変な印つけてたな
変な印？
こんな形の
これって「ガラメリ3世」の花押だぞ
ガラメリ3世…？
なんじゃそりゃ？
ヒョウタンを自在にあやつるらしいんだ
ヨネザアド生まれのヒョウタン研究家でな
オレはテンプラを自在にあやつるぜ
なに言ってんだよ
パ
ら


キャーッ
パチ
パチ
バイオリンが火事だぞォ
いーのです
ダラケた音を立てるので燃やすのです
ダラケた音って言っても……高いでしょうそのバイオリン
あれはペッタ工房の23番ですから……金貨15枚はします
きっ
金貨15枚
なんてことすんのよーっ
焼くんならオレにくれよーっ
見せしめなのです


見せしめ？
ええ
この名器「月耳」なんかも
どうも時々シャキンとしない時がありまして…
名器と言えどいつでも燃やしてやると
ヒゲ丸 月耳っていくらすんの？
アレはお金に換算なんてできません……
じゃ紅マグロなら何匹だいっ
ぜんぜん成長しない男だなあ
黙ってるとこみると10匹以上かなーっ
タンタタッ



それ
それ
おんやあ
どーしたんだあ
いくら叩いても
なんも変わらねぞう
ドッ
素晴らしい楽器は
シブトイのさ
そー簡単に
包まれないのさ
テンプラの
なんか
アッという間
だったのに
アレは安物さ
ドッ



そんなに安物なんですか
でもイイ音するんだよ
オッ
やったっ
くーっ
素晴らしい
最高山の頂点です
ありがとガラメリ3世
ムッ どうしてワシの名を
オレの家来のパンツが当てたのさ
ヒョウタン研究の偉大な方だと……


照れますなあ
テレる？
テレるってなんだ？
おまえには一生関係ないことだよ
3日後
ハア ハア
いらっしゃいテンプラ君
いえ――
冷やし珈琲始めましたよ
「月耳」を昨夜弾きましたか
もちろんです
夜明けまでビッチリ弾いて


ガラメリ3世様の見事な箱に入れて
この金庫水晶へ
金庫水晶さえなけりゃあ盗めるのになあ
そうだっ新曲ができたんです
パコッ
聴いて下さい
！
ない…
ああ…やっぱり


オレのギターも さっき開けたら ないんだ
あのよ
あの箱は 2日に1度 軽く水かけないと
中の物 消えるんだとよ
もくっ
どうして それを早く 言わないんだよ
照れますなあ
な
なに言ってんだよ
あの親父が 照れてさ…… それで 言うのを 忘れたんで オレに言ってくれって 言われたのを 忘れたわけだ
楽器はどこへ 行ったんだよ?


んなもん知るわけねーべよ
ガラメリ3世に聞いてこよう
あの親父よ「照れます」とか言ってもう旅に出たぜ
キエ〜〜〜ッ
月耳様ああ
親方しっかり
バイオリン一個で気失うことねーべよなあ
おまえねえ
月耳ってのは紅マグロ何匹と交換できると思ってんだ?
んーっ……まさか……100匹か
昔王様がフジルワの領土と交換した楽器なんだぞ


紅マグロ100万匹くらいだ
ヒャク……
キャ〜〜〜ッ
月耳様ああ
3日後
くっそー
あの親父どこへズラかったんだあ
やっぱりガラメリ3世が盗んだんじゃ
そんなことするかなあ
するわよ紅マグロ100万匹に目がくらんだのよ
ヒデヨシ君そろそろ
ヨダレかけの交換した方がいいですよ


ヨダレの泉だね
まったく……
100万匹の威力だよ
たまいやー
あら
このっ
このーっ
ガンガン
まーだ叩いてんのか
よーし
ヒデヨシ落としでとどめさしてやるぜ
この辺に置いた方がいいですか
オーッ
行くわよーっ
贅肉爆弾
あれ


ああ
月耳が入ってる
へえ？
なんだとォ
どういうことなんだ……？
確かに消えたはずなのに……
おおっ月耳様
うれしーな
めでたい
イエーッ
おっ
不思議だ

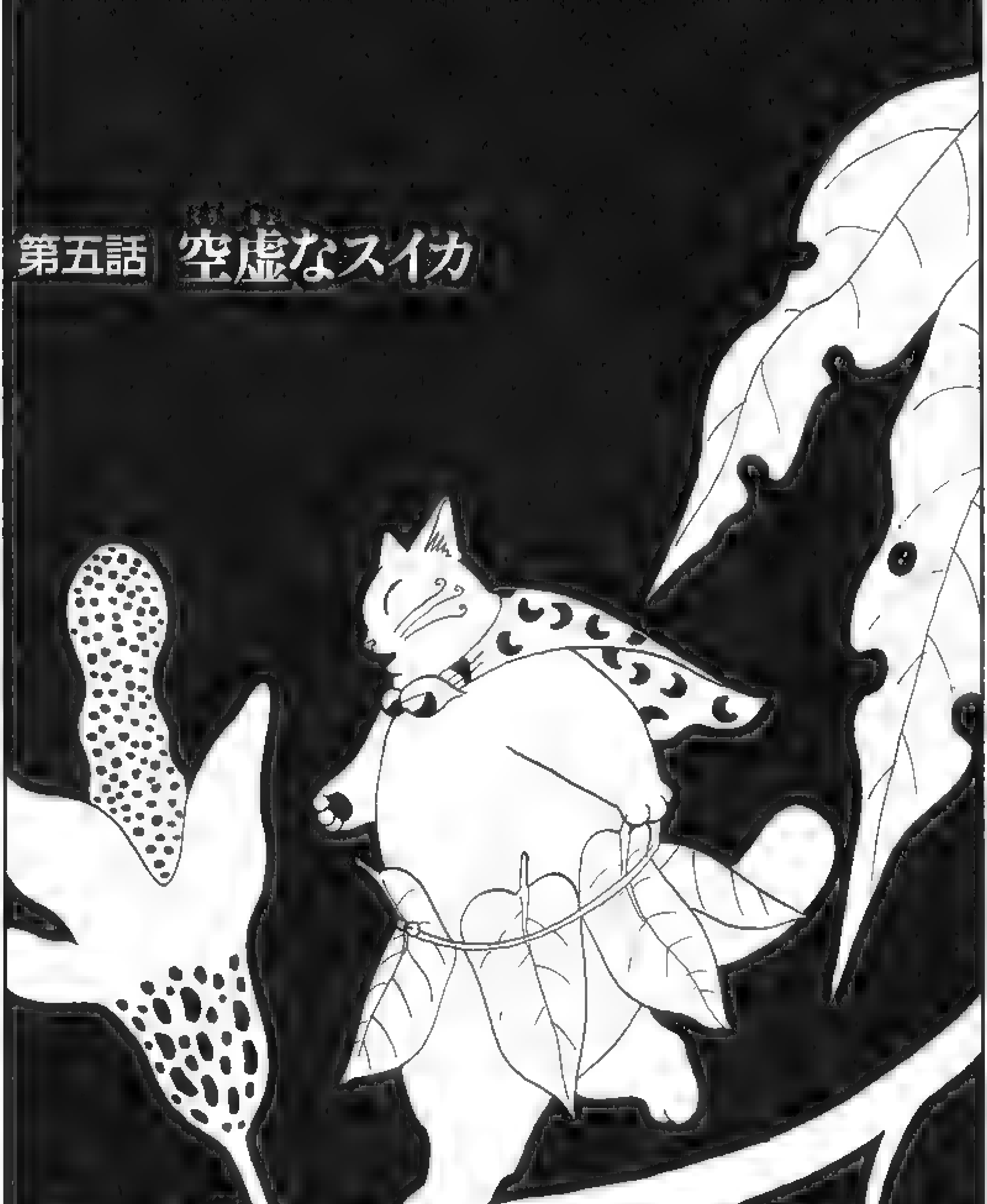


音圧が逞しくなっている
あっ
これは？
ああ
旋律が湧いてくる
にゃ？
そうか……
このバイオリン


旅をしてきたんだね


旅はいつも新しい旋律…

第五話 空虚なスイカ




ポン
しっかり実がつまってるなあ
ああ
今年もダメかねえ
絶ー対ダメよ〜〜っ


スイカ泥棒は
ダメなのよーーっ
このオレがとっつかまえるわよーっ
昨年までさんざん泥棒していた奴をやとうとは
ガッポラ翁も考えたな
いかにも考えたさ
泥棒をやとえば泥棒は消える
ところで貴方たち見つかったかい
ガッポラ翁こんにちは
いえダメです みんなしっかり実がつまってて



そりゃ そうじゃろう
中身が空っぽの スイカなんて
ワシが若い頃 1度見ただけじゃぞ
それって こんな模様じゃ なかったですか?
ウーム… 憶えとらんなあ
まあ 空っぽの スイカなら 叩いた瞬間
ボーンと いい音が響く じゃろう
ああ……
テンプラ くーん
怪しいスイカ 発見しましたっ
怪しい スイカ!?



紋様が似てるようにも思うけど……
オレがためしてみよう
ポン
実入ってますねぇ
もしも空っぽのスイカに出あうとね
ボーン
といい響きを出すはずなんだ
中身のないスイカなぜ探してるの？


あーっ その質問には ワシが答えよう
ツキミ君 スイカの原産地 どこだか ご存じかね
確か 銀しぶき海の バケチュバ島
そう その バケネコ島には バケネコ文明 つーのがあったのよ
バケチュバ 文明でしょう
そう それが 一夜漬けで 腐ったのだ
一夜で 消えてしまった ということだね
大津波で いっぺんに 滅んだん でしょうか
大ダコじゃよ
大ダコに 襲われて 墨ぶっかけられて 滅んだのじゃ
まっ黒になって なーんも判らなく なったのじゃぞ


なにも残っていない このバケチュパ文明を 調べてみると
スイカの栽培技術が 異常に発達していた らしいんだ
空っぽのスイカ?
ゲムエム いわく
「すべての文明は 盛衰する「空虚な スイカの如く」」
ゲムエムという 植物技師は 「空っぽのスイカ」を 作ったと言われている
プンプン 節臭い 言葉
味わい 深いねえ
この「空っぽのスイカ」が アタゴオルでも 生ったりする らしいんだ
翌日
ダメよーっ スイカ泥棒



らっ
ド!
コラ なにやってんだ
あー んまい
スイカは んまいなあ
泥棒猫ども
銭はらえっ
こら ドラネコ団
ぶっとばすぞォ
なにが ぶっとばすだ
おデブちゃん
バーロ
おまえなんかに 言われたく ないぞ
んだ…んだ
あれ
なろーっ


くらえ
ドッ
げっ
ぐわっ
キャー
ポン
ボーン
あっ
あの音っ
ああ!!
確かに
ぐはっ
びだ
あっスイカに


あの紋様が浮かんだぞ
コレだコレだぞっ
ねえねえ
「しっかりしろ」「だいじょうぶか」とか…ないわけ？
翌日
ホホホッオレが見つけたのよ〜〜っ
判ったから早く下りなよ
このスイカの中から金貨が出たらみーんなオレのもんなのよ〜っ
全部やるから下りなよ
それでは始めます
カチッ


ホントに
なんもねえぞ
呆れた
スイカだなあ
わっ
こつけなモノ
なんでわざわざ
作ったんだ?
それが
謎という
ものです
あれっ
この種
……!!
穴が
あいてるぞ
これは……


ビエーッ
ポオーッ
種笛ですね
なんだか
とても古風な響き
ビッビッ
ポーッポ
譜面が浮かんだぞっ
ヒデヨシが吹くと
なんでも変な音に
なるなあ
あっ……
スイカの皮に



そうかっ コレなんだっ
なにがコレなのさ?
「銀しぶき奇談」という古文書によると
「空虚なるスイカ八っつに割りしのち笛を吹く…古代の遊びなり」とあるんだ
ほう
古代の遊びって……バケチュバ文明の!?
たぶん
よ〜〜〜し ワシにまかせろ
ひとつ もらうぜ
ヒデ丸 ついて来たまえーっ
はいっ 博士っ

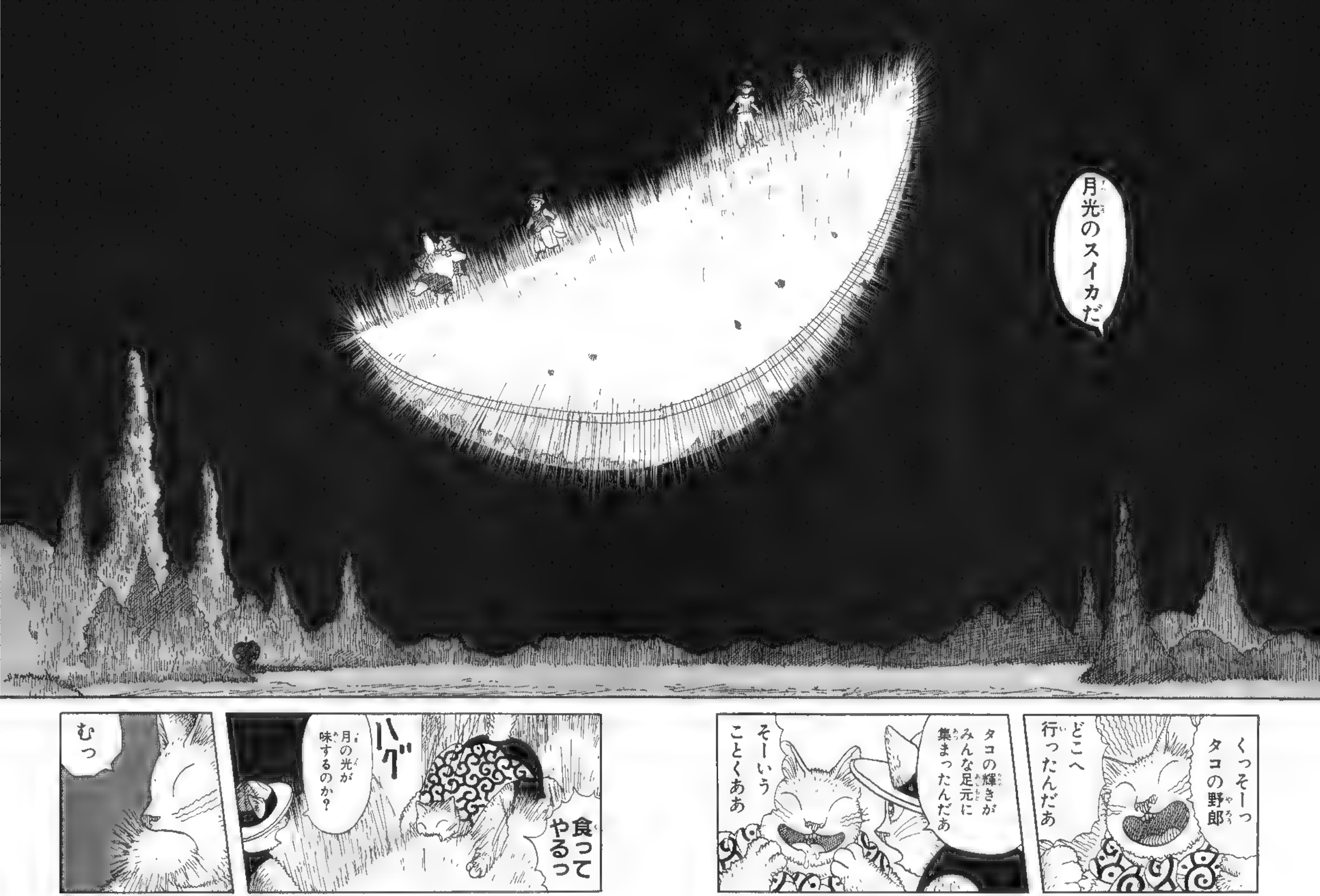

ブツ
ブコ
博士
デタラメに吹いても ダメですよ
あの譜面の曲を 吹かなくては
てきとーで いいんじゃないの?
絶対 ダメ です
オイラ 旋律 憶えてきましたから いっしょに吹きましょう
ヒデ丸
まじめだねえ
不思議な… いにしえの旋律…



つまらん曲じゃのう
ブゲ
音がはずれてますよ
もう帰ろうよ
えーっ
上陸ーっ
よー諸君 そんな地味臭いマネはやめて 大いに飲もうではないかっ
うっ
あっ
どうしたのさ


ら
タコだっ 光ってるぞオ
ななっ なんですか パンツ君 アレは!!
あの形
銀しぶきの針々ダコだが なにが輝いているんだろう


あれは月光です
月光ダコだとォ
どんな味なんだあ
大変だっ!!
こっちに来ますよ
食ってやる
キエーーッ
わぁ
タコが
ああ
まるで


月光のスイカだ
くっそーっ
タコの野郎
どこへ
行ったんだあ
タコの輝きが
みんな足元に
集まったんだあ
そーいう
ことくああ
食って
やるっ
ハグ
月の光が
味するのか?
むっ



う
んまくも
なんとも
ない
光が
チャプッ
シュッ
なんだ
あれは!!
…これは


バケチュパ文明の民じゃないか!
あの空のスイカの中には遠い昔の時間が入っていたのか
さっきオレたちが吹いた曲を歌ってるな
ああなんて歌ってるんだろう
判るよ
えっ判る?
ええ…じっと聴いていると……
……波ハ行ッタリ来タリシナガラ
尋ネテイルノデス

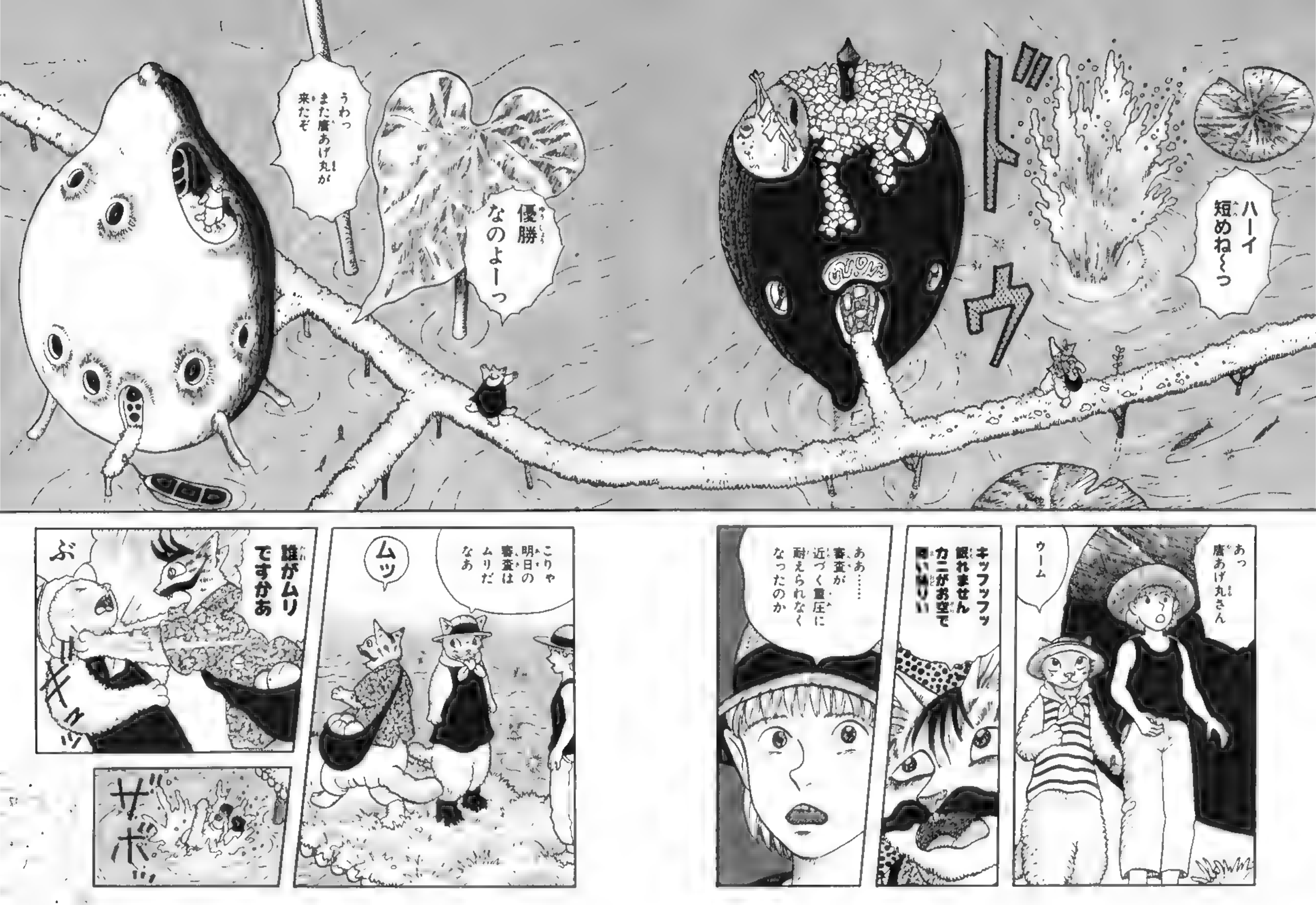

跡カタモ無ク
消エテイク時間ノ
向コウ側ヘ


ナニカ伝エタイコト
アリマスカ


第六話 青い宝石


ザーッ
へえっ 審査？
そーです
ヨネザアド床屋賞の審査店に選ばれたのです
入賞すると銀鯨が食えるんだってよォ
鯨はヒデヨシ君に差し上げましょう
私は栄誉が欲しい
ポン
ポン
がんばるのよ〜〜っ 親方〜っ


バイオリンでカニを操るなんてムズカシイからなぁ
審査ってどうするの？
床屋組合のガッタモラ会[redacted]という方が来るのです
ガッタモラって……
確かカニの研究家だぞ
おーいプク松爺がんばるのよ〜〜〜っ
あっダメです刺激しないで
キッフッフッ
大陸随一の栄誉が横歩きしてくる……
6日後



ハーイ 短めね～っ
ドトウ
うわっ また唐あげ丸が来たぞ
優勝なのよーっ
あっ 唐あげ丸さん
ウーム
キッフッフッ 眠れません カニがお空で
ああ…… 審査が近づく重圧に耐えられなくなったのか
こりゃ明日の審査はムリだなあ
ムッ
誰がムリですかあ
ぶ
ザボ


牛みつ医者
しっかりしろ親方ーーっ
あくっあくっ
もータメなのでございますう
何言ってんのよォ
寝不足が続いててブク松とアワ太の区別がつかなくなったのです
カニなんてみんな同じだべよォ
それじゃあ操れません
うーっ
音出せば勝手に髪切るんじゃないの？

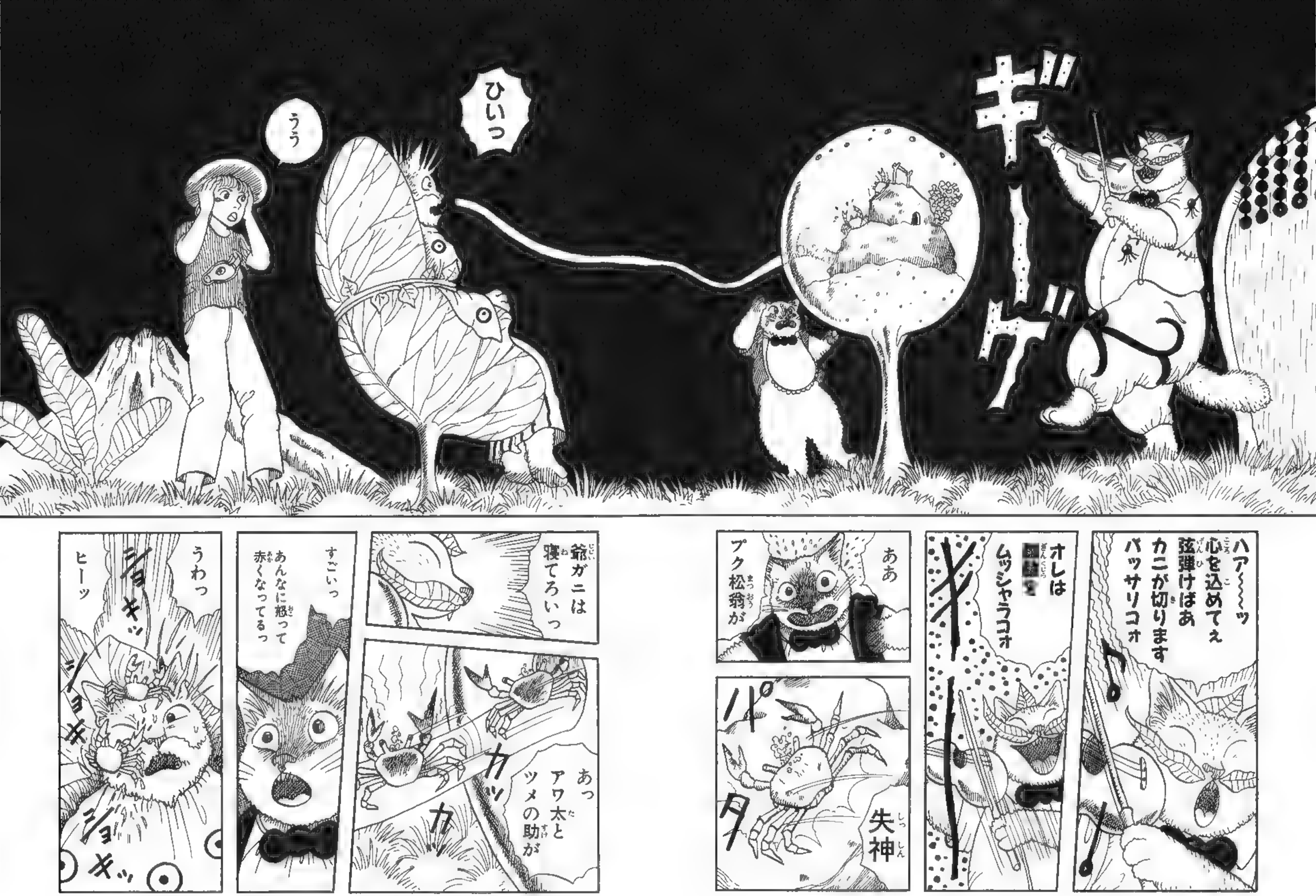


一弦の音はブク松とタテミ二弦はアワ太とツメの助と決まっているのです
相手が判らないと失敗してしまいます
そんなあオレの銀鯨の肉はど――なるのよォ
酢ダコでガマンしましょーっ
くーっ
ザーッ
翌日
弱ったなあ…来ましたよ
おお
初めまして私がガッタモラです
いらっしゃいませ
唐あげ丸さんはドチラかね
じっ実は……親方はですね


ガッタモラ君っ
唐あげ丸はここじゃよ
おおっ
唐あげ丸さん
審査に来ました
よろーしく
よろーしく
銀鯨ーっ
落ちた
オレも
そー思う
ほう これが自慢の
カニ君らかね
紹介してくれ
よー
ござんす
鉄棒してんのがプク松
その下にテンプラガニと
パンツ丸……
えーでは



始めます ヒデ丸 夢のスープを
夢のスープ?
スープ飲むと眠くなってタコとかイカの夢見ちゃうのよーっ
スープはいりません 君のバイオリンでカニを操るところが見たいのです
いー度胸してるぜアンタ
では まず このよーにして
なんのマネじゃ?
ギ
寝てないお客さんの体が動くと
カニたちが頭から落ちるからですヨ
では いくわよ カニども


ギ゛ーゲ゛
ひいっ
うう
ハア〜〜〜ッ 心を込めてぇ 弦弾けばあ カニが切ります バッサリコォ
オレは[redacted] ムッシャラコォ
ああ プク松翁が
パタ
失神
爺ガニは寝てろいっ
あっ アワ太と ツメの助が
カッ
カッ
すごいっ あんなに怒って赤くなってるっ
うわっ
ヒーッ
ショキッ
ショキッ
ショキッ



あっ 先生ーっ
おーっと 手下には
うっ
眠り花粉だべよ
さーっ
ガンガン弾くわよーっ
やめろ 貴様 なに考えてんだーっ
銀鯨ちゃん
なんだとっ
入賞するのよっ そして銀鯨の肉を食べるのサーッ
どう? 銀鯨くれる?
貴様〜〜っ 食い意地に負けるほど 床屋組合は甘くはないぞっ


そんな脅し声で
あきらめるほど
オレのヨダレは
薄くはないぜい
ホーレホレ
つるつる
頭に
なっちゃうよ
うっ
プル
プル
あんまりヒドイ音なので
カニが痙攣してるぞ
猫だって
痙攣したく
なる音だ
う
この粒は？


ああ「青い粒」だ
早くこの縄解いてくれえ
鯨の肉食わせなきゃダーメよーっ
ギーッ
ギーッ
判った食わせるから解いてくれっ
なんだとォ
くくくっ あの青い粒っ
天井に当たって消えてしまったけど
なんなんですかアレは?
「カニの宝石」じゃよ
カニの宝石!?


私は長いこと カニの研究を しているが
カニは 実にまれじゃが 青いアワを吹くんだ
オイラも今まで 2、3回 見たこと ありますっ
オレなんか
あきるほど 見てるのよーっ
おまえ 口から出まかせ 言うんじゃないよ
フッフッフッ 出まかせか どーか お月様が教えて くれるぜ
んっ
ザーッ
ホラね
ホントだ

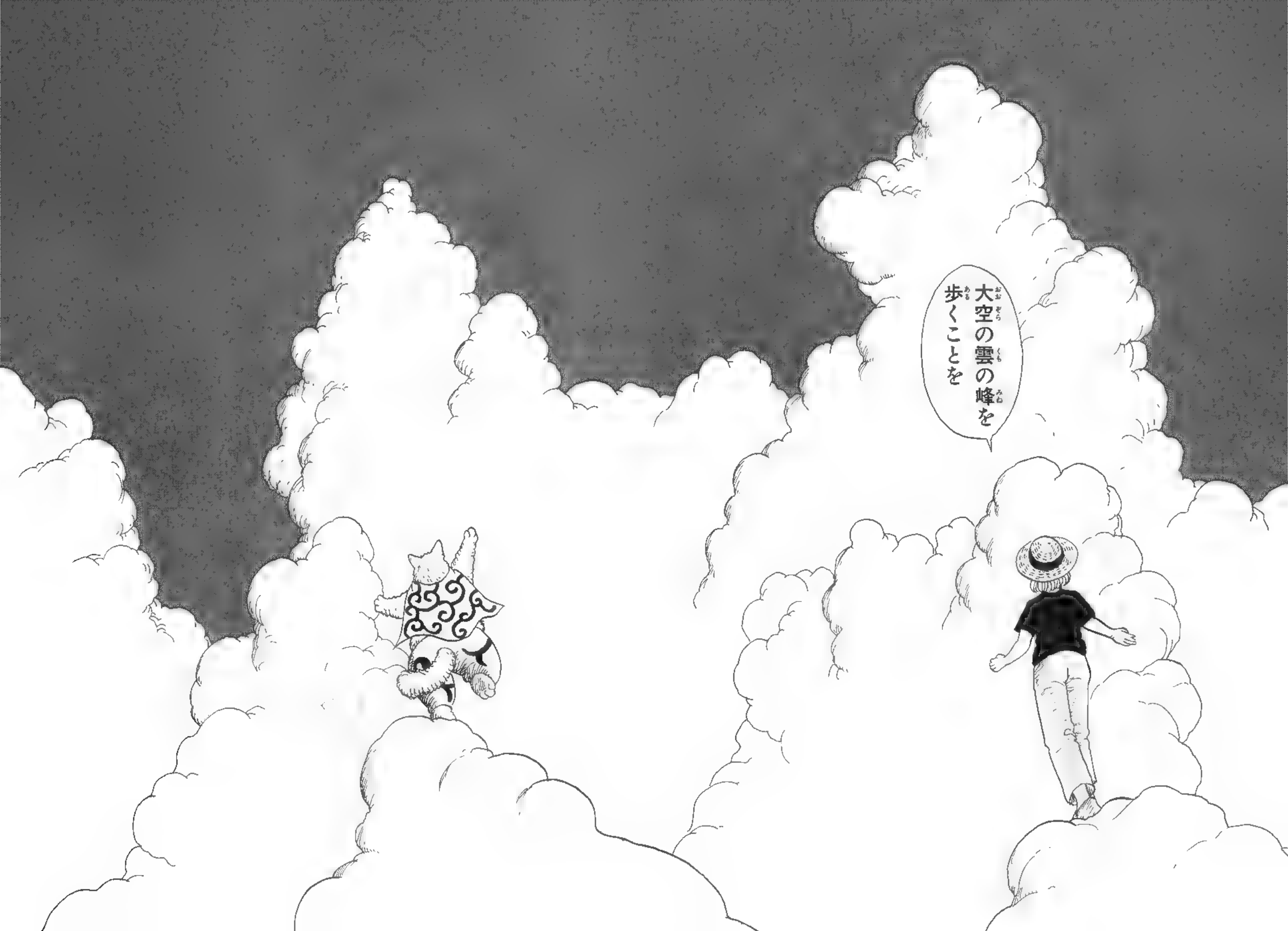

ブク松たちがどこかへ行く
そーっとね
でも変だなあ勝手に外に出たりしないのに……
オレよっ時々夜中の床屋に来て
退屈だからデタラメにバイオリン弾いたりしてんのよ
えっ
でさっオレがガンガン弾いて
カニが痙攣したりアワ吹いたりしてよ


それから
しばらく
すると
あーやって
出かけて行くのさ
青いアワも
吹くのかね？
ザーーッ
フェフェ
ついて来な
フフ　ほらほら
あっ
！


ブク松たちが演奏してる
トン
トン

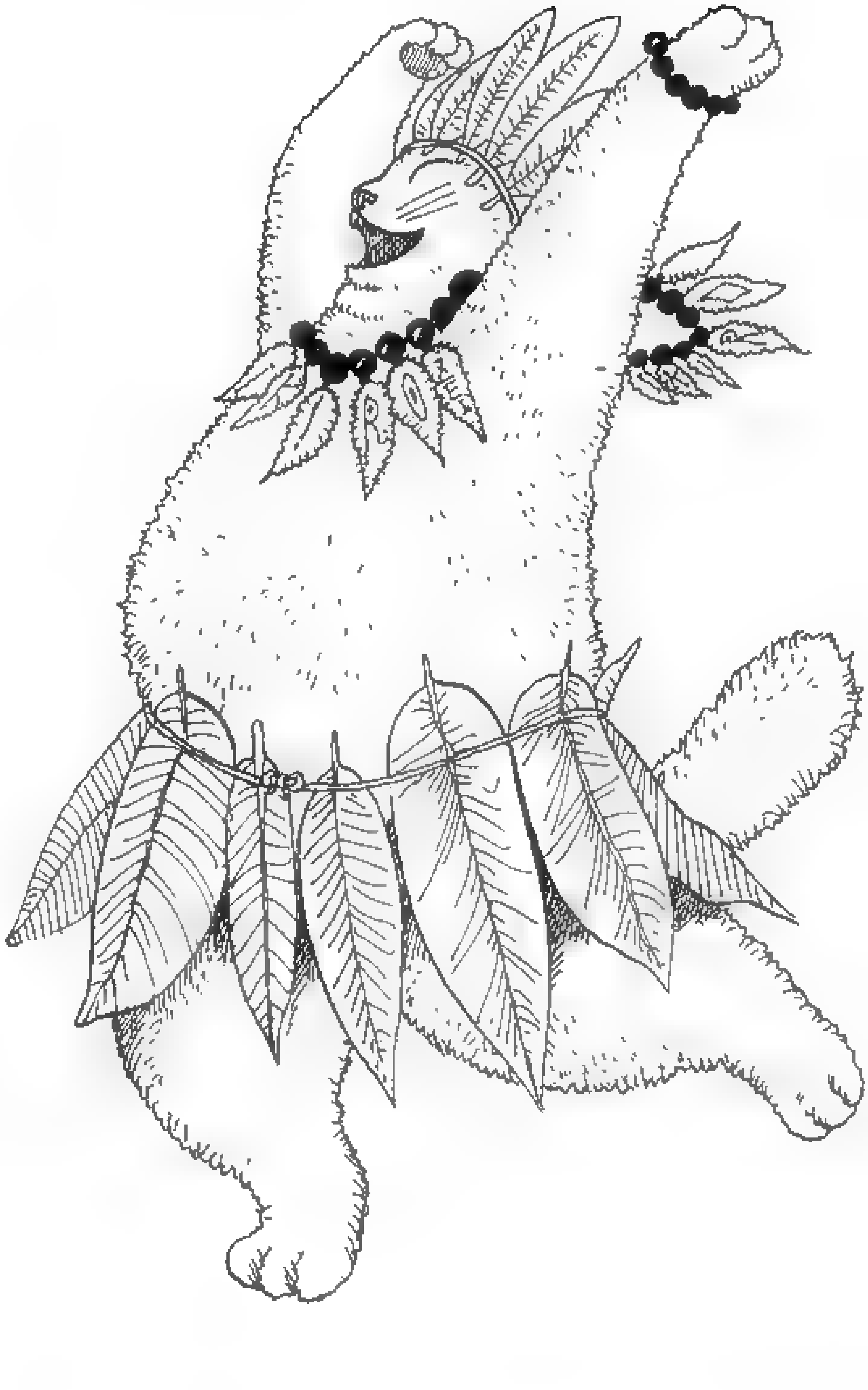

いい音楽を聞くとオイラも楽器やりたくなりますが
カニたちはヒドイ音を聞き痙攣なんかしちゃうと
耳直しに演奏するのですね
ポ
わっかりませ〜ん
ヒデ丸君の耳直し説に1票だな
あっアワ
青い宝石を吹いてますよ
おお流れてくる
すばらしい
フフフッこの青い宝石とはねカニたちの願いなんだよ


カニたちの願い？
ささっ
2、3粒飲んでごらん
はぐはぐ
なんの味もしませんねえ
んっ
しーん
そうか…カニたちは
川辺の水面から思っているのか


大空の雲の峰を歩くことを


雲は大空のハンモックだね

第七話　ボイボイ弾




うーっ暑い
ミーーン
ミーーン
今年の残暑はきついなあ
セミの鳴き声がいちだんと暑さをかきたてるぜ
ミーーン
あれ
セミよりももっと暑い鳴き声が


暑〜〜〜っ
たまんねえよお〜〜〜っ
テンプラ パンツ 助けてくれーっ
汗ふいちゃうべ
うわっ 抱きつくな——っ
ところで君たち ド■に行くの？
古本屋だよ
な——っ 古本なんて面白くないぜえ
ビール飲もーよ


ようパンツ
やあ
なんか面白いもの入ってる？
32番枝のところに懐かしい顔があるぜ
懐かしい顔？
おいヒデヨシ
ヨネザアド幼稚園で使ってるタコの絵本が入ったぞ
タコの絵本だとォ
オレは子供じゃないわよっ
ふっ
コレか


こんなタコの絵見て子供はヨダレたらすんだよな
お〜〜い懐かしい顔って誰なのさーっ
誰だと思う？
あらコイツ……
花火屋じゃないか
3年前の夏大爆発起こしてアタゴオルから逃げた奴だな
爆発の原因はおまえだろう


記憶にございません
ホラ
ここに書いてあるぞ
「その
森の問題児
ヒデヨシは」
「私が花火を
作っていると
やって来て」
「タバコを吸ったり
マッチを擦ったりして」
「花火工場は
大爆発」
「私はこんな馬鹿の住む
森にウンザリして
アタゴオルを出たのです」
「私も落とし穴を
掘ったりして
対抗しましたが」
「ついには
たいまつを
投げ込まれ」


「あーっいまいましい デブ猫ヒデヨシ」
花火屋め〜〜〜っ よくも悪口をっ
悪いのは おまえだろう
「私はくやしくて くやしくてよっぽど 禁断の伝説の 花火をブチ上げて やろうと思いました」
禁断の伝説の花火
「しかし工場の地下室も 吹き飛び 花火の 設計図を入れた箱も 見つからず」
花火工場跡
ねーーっ
禁断だとォ
禁断は 破るために あります
伝説の花火 ブチ上げようぜ
禁断なんだぞ ダメだよ


設計図の箱を探しちまえばコッチのものさ
3日後
暑ーーっ
箱なんかどこにもありませんねえ
こら親父 さぼってないで 少しは探したまえ
暑くてたまんないのよォ
それから時王君 オレは親父じゃないのよっ お兄様なのよォ
そう言えばオイラ パンツ君からあの本借りたんですが
その禁断の花火が上がると とても涼しくなるそうですよ
くくくっ 絶対に上げっぺよォ


しかし こう暑いと 腹へるなあ
あら
ない 弁当箱が ない
ええっ また弁当箱 埋めたんですか
なあヒデ丸 あの親父 どーして 埋めたり するんだ?
盗まれると 思ってるらしい んです パンツ君によると ケダモノの習性だ そうです
ら
円い 弁当箱が 変な形に
えっ?
ヒデヨシ君 これだよっ ホラ 文字が 書いてある
なんて 書いて あるんだ?


ボイボイ弾
ボイボイ弾？
やったっ さっそく パンツ君に 知らせましょう
だって禁断の 花火ですよ 危険ですよ
甘いぞヒデ丸
内証にして オレたちで 花火を作るのさ
花火上げると 涼しくなるんだろう
それに
花火をブチ上げて 逃げた花火屋の 恨みを晴らして やるのだーっ
原因は アンタで しょう
2日後
しっかしよーっ


鉱物小僧の時王がいなかったらとっても探せないな
ホントですね
へへっ
ミーー
コン
ミーー
花沸石見っけ
これでそろったぞ
わおう
それにしても燐魔岩と気列石を混ぜたりしたら
大変な事が起こりそうだな
ええっアタゴオルの森が吹っ飛んだりするんですか
いや……そういうんじゃなくて……ウーム
やってみれば判るわよっ


確かに
どんな事が
起こるのか
ワクワクするな
水占いは
いかがーっ
うっ
3日後
よっ
インチキ
占いテマリ
暑いなあ
ミーン
汗かき風呂入らず
悪臭猫っ
ずいぶん
着込んでる
じゃないの
ホホホ今夜の9時に
なると スーーッと
涼しくなるからさあ
暑さを味わって
いるのサ
なんで
涼しく
なるのよ


水占いに聞きましょーっ
どーせなにも判らんけどねーっ
コラどういう事なのよっ
つめ
あ〜〜っ腹が立つ
あれっテマリちゃん
どうしたんですか
ヒデヨシの奴が「今夜の9時に涼しくなる」とか
自信たっぷりに言っちゃってね
今夜の9時に涼しくなる……？


あいつ絶対なにかやらかす気なのよ
まさか……禁断の花火作ったんじゃ？
伝言林
「本日の夜9時暑い体を涼しくしてやるぜ」
「オレの弟子のヒデ丸と時王が作った花火なのよ」
ヒデヨシが作ったんなら不発だろうが
早く捜し出さないと大変だぞ
ヒデヨシ君そろそろ9時ですよ
よーーしやるわよっ


いたぞっ
こらーっ　やめろ
なんべんも聞いた「やめろー」の声
やめろーと言われてやめたことなし
ヒデヨシッ　紅マグロ1本やるからやめろ
くっ
紅マグロも食いたいが……この暑さをなんとかして
禁断の花火が見たいのよぉ
ジジッ
ドシュ
ああっ


ペホーーン
ペホーン！
地味ーーっ
ショぼい
う〜〜っ
テンプラ様
紅マグロ
ごっそーっ
さまーっ


上げたから
ダーーメ
くっそ〜〜っ
なんだよ〜〜っ
しっかし暑いなあ
ボウッ
うっ
あっ
なんだアレはっ
ぐえ〜〜っ

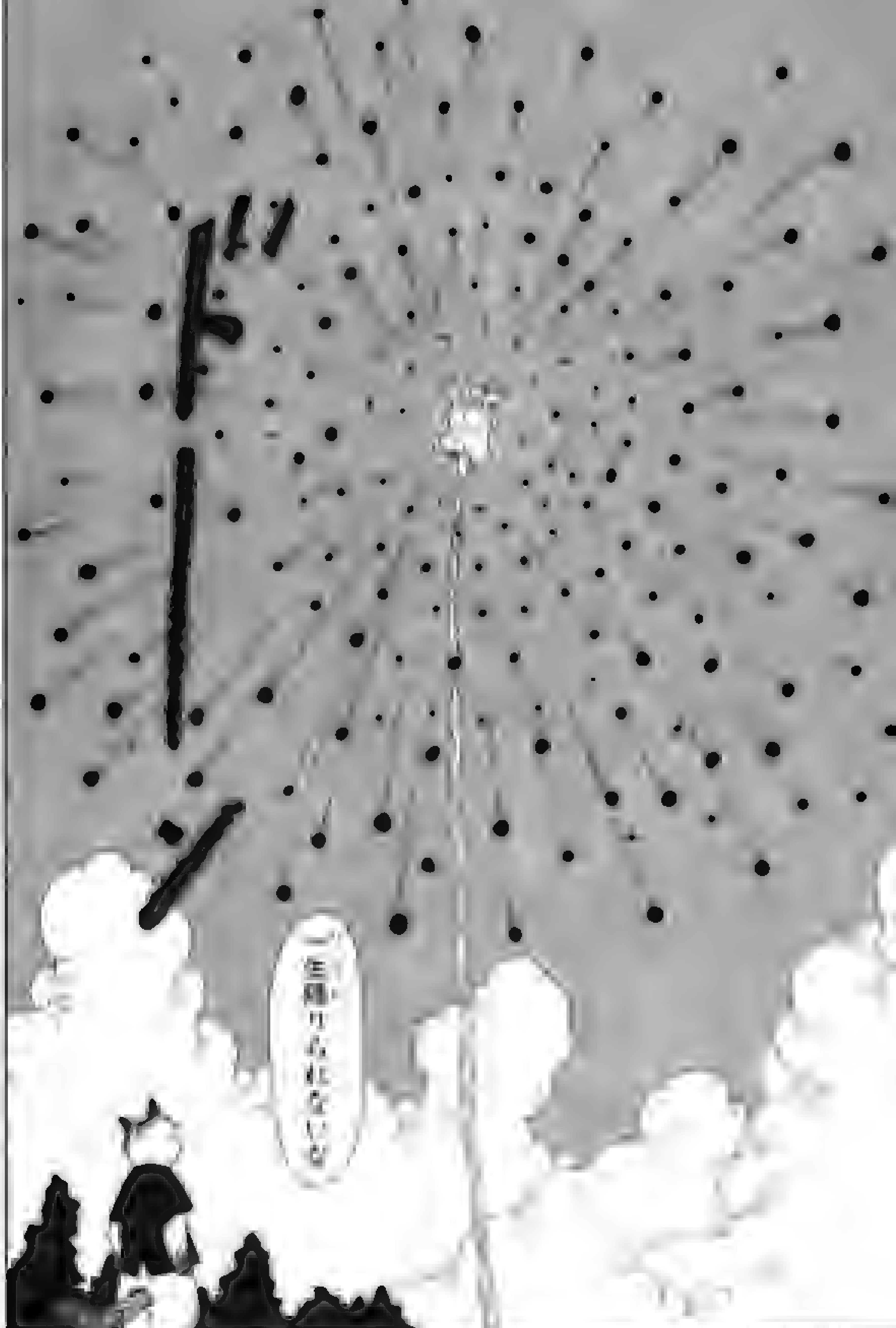

涼しーーっ
ドドーン


わっ
涼しいって わめいてるぞ
あらら 意識が ないよ
バシ
なにが涼しい だよなあ
こんなに ムシムシ 暑いのに
ボウッ
あっ
ド
涼しーーっ
こっ これって まさか
ああ 「暑い」って 言うと……


涼し――い
ドーン
涼しいのよーっ
ドーン
涼しいーっ


わお
納涼ーーっ
最高
いい気分が破裂してるっ
でも変だな
どうしてこれが禁断の花火なんだ？
3日後
しかし恐ろしい花火でしたねえ
ホント 朝方まで破裂し続けて死ぬかと思ったよ
助けてーーー
パパン
パン
パン
そしてまだ破裂してる
でもだいぶ小さくなったなあ
いいかヒデヨシ


ボイボイ弾の説明書によると
破裂しているのはおまえの心の中の「欲望」なんだ
欲望を捨てないと
体が本当に死んでしまうぞ
捨てろって
どうすりゃいいのよっ
いいか
生ダコの事を考えるんだ
そしてうまそうなニュールンとした生ダコを
ドブ川に捨てるんだ
ニュールンとした生ダコを……捨てる……
う
タラ
タラ


ドーン

第八話　嵐ノ中ニ居マス





……ふう……
おや……
チマリちゃん 溜め息ついて
どうか したんですか？
あっ
ゴメンなさい 気にしないで
そういえば 最近 占いの店 開いていない みたいだけど…



ええ……
ちょっとね
あれ…
得体の知れない臭いが
秋なのよ〜〜っ
ドスドス
テマリーーッ
秋なのよっ秋
アンタそのマント夏から洗濯してないでしょう
い〜え
買ってから一度も洗ったことないわよォ
まったくもう


「テマリは沼で洗濯に」
ジャブジャ
「ヒデヨシ君はお昼寝をしてましたいえらいいえらい」
なにがいえらいだよ
こんな臭い存在しちゃいけないのよ
ジャブ
しかしヒデヨシって
ずいぶんマント持ってんだなあ
おしゃれってことですかねえ
あれえっ団子屋の旗までマントにしてるぞ
でもやっぱり蓮々森のマント屋の生地は しっかりしてるねえ
あ〜っなんだか私もマント欲しくなった
うーむ
オレも風呂敷じゃないマントが欲しいなあ


よーし
諸君
マント買いに
行こう
お出かけの準備
するからな
いちいち
猫がえしなくても
いいよ
確か
赤いのが
ガラ
ガラ
相変わらず
ゴミ溜め
みたいな
部屋だなあ
テマリの
部屋と
かわり
ないぜ
なに言ってんのよ
おまえなんか
家に入れたこと
なんかないよ
キッチリと
鍵もかけてるし
こんな鍵かね


あっ
ほんとにこんな部屋!?
そ〜〜なのよォ
ゴミ溜めに住むテマリなのよ〜〜っ
ひからびた酢ダコの足や食い散らかした魚の骨とかよ
も〜〜っ いいかげんなこと言わないでよっ
見たいっ 見せて下さい
お宅拝見でーーす


女ヒデヨシだ
混沌としてますなあ
え〜っ昔は
こんなグチャグチャじゃ
なかったのよ
いーのよ
オレの部屋と
同じなのよォ
でも
違うよ
ここにあるのは
2種類
楽器と
占い道具だけ
そういえば
そうですね


部屋の模様は
心の一部……
なにか胸の中で
混乱しているものが
あるんじゃないか？
んーっ
実は占いの道で行くか
音楽の道に行くか……
迷っているんだ
そこの
貴方
お主の将来は
この透視堂スミレが
見てしんぜよう
なにが透視よっ
にごった腹ワタに
なにが見えるっ
おお見えます
占いも音楽も
才能無ーし
貴方の道は


タコの着ぐるみ着て踊る女
これは当たる大当たりじゃ
ワシは毎日見るぞっ
ら
しーーん
蓮々森
ついて来るんじゃないよ
失敬な!! ワシも客だぞ
なかなかいいねえ
おっ


凄い
鉱物が縫いつけてあるね
先祖の倉庫を整理していたら出てきたんだ
イエーーッ気に入った売ってくれーーっ
売るのはいいがさわれるかな？
なぬ？
ほほほ
ちょっとシビレますなあ
ちょっとだと…
普通の奴はさわれないマントだぞ
シビレますーーっ


シビシビ気持ちい〜〜っ
ほんとにさわれないのかなあ
チョッと失礼
んっ
ぐっ
ギャッ


よく こんなものが 着れますね
ちょっと シビレるのよ
テマリに近づくと
ホーラ もっとシビレんのよ 変だよなあ
マント屋の親父が 言ってたろう
この世界に あふれる 悩みに反応する マントだから
普通の者には さわれない マントだと
おまえは 猫でなしな奴で
他者の悩みなんか なんとも思わないから 着れるんだろう
このシビレが たまんないのよーっ
も——っと も——っと 悩みましょう
悪党
3日後


水占いは
いかがですか
さーさーっ
透視堂スミレじゃよーーっ
ワシの方が当たるのよォ
うるさいなあ
もっと向こうへ行ってやってよ
おや お嬢さん
仕事のことでお悩みじゃな
フムフム見えました
貴方にふさわしいお仕事はっ
どうせタコのなんとかなんでしょう!!
惜しい!!
タコの着ぐるみ着て踊る女じゃよ



おや
時王くん占いかね
いーえ
凄い
これが噂の鉱物付きマント
なにが凄いんじゃ？
錫針岩と放閃弾石が
こんなに近づけてあるのに炸裂しないんだもの
なぬ？
嵐を起こすような恐ろしいものだぞ
荒らし？
そーいえば最近 魚屋荒らしとか やっとらんなあ
どうしたらこんな技術が使えるんだ？
ヒデヨシ君あんたのはおっているマントはね


らっ
ついて来るんじゃないよもーっ
そんな占いの道具などすてて
着ぐるみに縋るのじゃ
縋りなさい
お主は救われるぞォ
誰がおまえなんかに縋るもんかっ
縋りなさーい
!


わっ
なんだ
コレは？
まったく
光に包まれた瞬間は
どうなるかと思ったよ
んめ〜っ
テマリの
性格は
マズイけど
ウドこんめえ
ゾワッ
おまえ
それ
食ったら
すみやかに
帰れよ
ら


あれ……マント
なんだ このマント
それって買ったやつだろ
違うよ
こんな透明なマント


さっきの光のせいじゃないか
うう……
このマントを着てるとヒデヨシのなにかが移ってくるんじゃ……
早いとこぬごう
ん？
あっ
にゃ
そうか


嵐ってこれか


らっ
くっ
崩れていく
みんな消えちまったぞ
みんな崩れていくぞ
いや……



水入り水晶が 1つ……
これって
私が子供の頃 もらったものだ
そうか
これが 私の道なんだ
んっ
ら
なんだあ 元のまんま だぞ
透明マントも 嵐も消えて
なんなのよォ


嵐か……
あの日以来
テマリはときどき
思うのです
なにげない毎日こそが
嵐なのだと
いくら整理しても
ほんとうに
大切なことが
なんなのか
判らなくなって
しまう大嵐
でも
心の中に
折りたたんだものを
広げれば
ホラ
世界の
ほとんどが



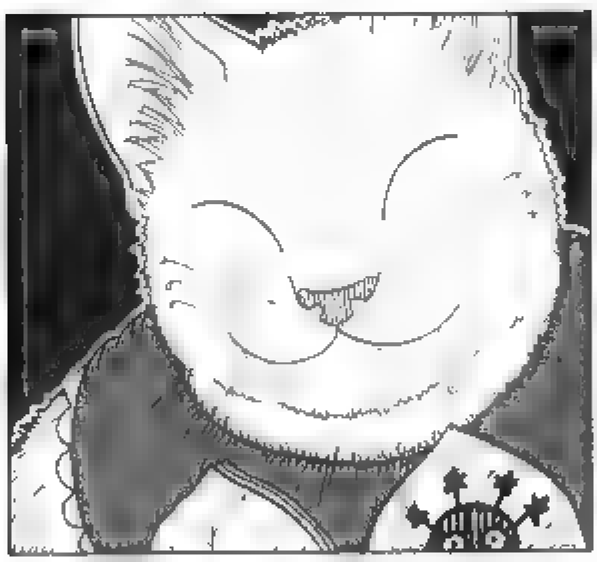
アタゴオルは猫の森③　おわり

ますむら・ひろし先生の最新情報はホームページ

「ごろなお通信」

をご覧ください。
イベントや新刊の情報、ファンと先生の
交流の場となる掲示板など、楽しみいっぱいです。

http://homepage1.nifty.com/goronao/



アタゴオル余波3

ますむら・ひろし

　庭の木々が黄色や赤に染まり、「おお、野田にも秋が来たなあ」などと感じながら二階の仕事部屋に入ると、アタゴオルにも秋が来る。思えば、ヒデヨシたちも随分秋の季節を過ごし、二十数度の秋が過ぎたはずなのに、彼らは年を取った風ではない。ヒデ丸にしても、いつまでも子供のままだし、ドラネコ団も何をやっているのか、集まったまま相も変わらずで、アタゴオルは時間が止まった世界のようにも思える。
　アタゴオルは、成長の無い場所なのだろうか。時間の止まった場所なのだろうか。そうしてコチラ側の人間だけが、年老いて行くのだろうか。
　地球の時間感覚のなかでしか、感じられないものの外に、やはり世界はあるのだと思う。
　たんたんと成長し、たんたんと終わっていく道しるべから、意識は逃れて、もっともっとゆっくりとした時間の河を、眺めていたい。
　想像力だけは、侵入されない、どこまでも飛べる歩幅を、与えてくれるのだ。
　『噴キマショウ』。子供の頃から、火山が好きだった。昭和新山の誕生を観測していた郵便局長の三松正夫氏は、そうした僕にとっては、神様のような方で、孫娘の旦那さんになった三松三朗氏は、やはり「火山馬鹿の気持ちが判る」方であった。地球に生きている人間は、この星の主のように我が物顔で自然を破壊し、それを開発などと呼び、挙げ句の果てに火山の裾野に別荘を建てて、火山が噴火したりすると、「火山を憎んだり」する。
　有珠山が二千年の三月に噴火活動を、また始めた時、某テレビ番組では、有珠山に別荘を建てた人たちを被害者のようにして写すのを見ながら、僕は思った。
　「馬鹿だなー、俺だったら、あんな場所に別荘なんか建てないし、噴火したからって、火山を訴えたり、こんな場所だなんて知らなかったなどという、泣き事は言わねーよ」。
　日本は、火山の島なのだ。そうした火山とは、地球が生

きているという証であり、そのような場所に住んでいるということを、人間中心に考えるのではなく、地球感覚から見ていく気持ちが、いつの間にか人間のなかから無くなってきている時、火山の凶暴な噴火は、人間への警告のように感じる。

この作品の表紙では、三松正夫氏の在りし日の姿をスミレ博士がやっている。二千年の有珠の噴火の際、三朗さんたちは避難所暮らしをしていて、避難先の人たちがホームページを作っているのを知った僕は、「たぶん届くのではないか」と思い、三朗さん宛としてメールを送った。そこのアドレスには沢山の「励ましのメール」が届いていて、「がんばって下さい」とか「こちらも胸を痛めております。早いこと噴火が収まりますように祈ります」といった内容のものがドコドコと届いているなかに、

「いゃー、ついに始まりましたね。でも、この程度で収まるのでしょうか。もっとドカアアンと噴いたら、馳せ参じて、見たいものです」的な内容のメールを送ったのだが、その晩、突然電話があり、

「三松でございます。大変、不謹慎なメールいただき、ありがとうございました」と三朗さんの声。あの一瞬、嫌味なのか逆説なのか判らなくなるような言い回しの中で、実は三朗さんも喜



んでいるのであり、「噴火した以上、どえらいものを目撃したい」という血の衝動は、電話の主にも在ることを僕は見逃さなかった。火山は恐ろしいものではなく、人間文明の傲慢さが恐ろしい、という三朗さんの言葉は、正夫さんの声であり、地球そのものの声でもあるのだ。

『噴キマショウ』と言っているのは、地球の声であり、私たちは自然に何度でも、ひれ伏すことの尊さを知らなくてはならない。

『風の雲母』。かつて『子供時刻表』という季刊誌で掲載していた『ジャリア』という作品の、主役をやっていた時王くんを、『噴キマショウ』から登場させた。僕は子供のころから、鉱物に対して、まーったく関心がなかったのだが、小さい頃の記憶が1つある。それは興譲小学校からの下



校の時で、精英堂という文房具屋の裏のあたりに、昨日までは無かった工事用の石がゴロロと、山積んであった。子供とは道草の名人である。さっそく、急に登場した石の山に興味を持ち、僕は一人でその石を持ち上げては、他の石にぶっつけて割り出したのだ。ゴン、ガゴーン。まったく子供はろくなコトをしない。すると石がぶっかけたり、しぶとかったりするのだが、突然パノクリと割れた石の中を見て僕は驚いた。なんと空洞で内側がギザギザの水晶だったのだ。さすがに、これは綺麗だと思い、その石を持って家に帰ろうと歩くのだが、重い、けっこうな重労働である。そうして家に持ち帰った後、当然それっきりになってしまったのだが、実に立派なジャリア野郎である。

鉱物に対し興味を持つようになったのは、宮沢賢治にはまってからで、八十年代の後半あたりからは新宿のミネラルフェアなどで、アンモナイト派になって、手首が痛くなるほど重い買い物をして帰宅をしたりするようになった。石もまた、鉱物事典などをみると、限りなく多種であり、こんな色合いが自然に産まれるものかと思うほど、派手な色彩になったり、綿毛のような鉱物があったりと、深い魅

惑の沼なのだ。
さて、この話のモチーフである「一日一日が何かの記念日」という意識のきっかけは、三月十九日のせいなのだ。それはブルガリアの天才フットボール選手フリスト・ストイチコフ閣下と、柏レイソルの喫茶室で、二十分ほどの御対面をさせていただいたという、記念日からきている。どうやら僕の好きなストライカーは、ロマーリオにしてもそうだが、組織や監督の言うことを聞かないが、実にヤルときはヤル奴で、人間性には問題がある的な者らしい。
『境目』。作品を描くということは、夢を見ていることと似ている部分がある。たとえば本日の夢。
「九六年ユーロ大会のツアーで知り合った新潟の橋本くんと、僕は町を歩いている。その風景は土湯温泉の旅館のようで、道を過ぎると、路上にカウンターだけの寿司屋がある。寿司屋の板前はおばさんで、どうも門前仲町の飲み屋のおばさんみたいだ。隣りの女性が僕の煙草を間違って吸い、テーブルには三個の煙草がある。その女性の注文したのは、スルメ寿司。ところがそのスルメは生きていて動いている。隣の女性が頼んだ赤茶色の牡丹海老の寿司は、シャリの部分ごと這いだしてスルスルと動き、誰かのカバンの中にスポッと入る。するとそのカバンが磯巾着のように動きだし寿司を食べてしまう」。
ここで、僕の日々のさまざまな記憶というものが、アチコチに登場しているのに気づく。
まずスルメは、三日前に見たテレビ番組で「スルメを灰汁につけて、生イカに戻す」という実験。煙草の三個は「猿傷」という飲み屋のテーブルであった風景。カバンも巾着も前日に見た何気ない風景。こうした記憶がどんな理由で現れるのか判らないが、夢のなかで吹き出してくる。この夢の凄さは、寿司が這いだして動いていくことにあるが、夢のなかでは、「おお、活きがいい」と思っても、けっして「何故動くのだ」などとは考えないことにある。まさにブルカニロ博士の領域。「コノ列車ハ、動キタイト思ッテイルカラ、動クノダ」に似ている。
さて、この『境目』という作品では、ヒデヨシが女装っぽく太い髪型のカツラを被るのだが、このカツラは「猿傷」に誰かがもってきたレゲエカツラで、そうした風景の記憶がヒョッコリと湧くのだ。最後の言葉としてある「他人と自分

の境目がない」という感覚。これは、幼児期の子供たちが短い期間持っているものだ。成長するにつれ、人はいろんな体験をして「臆病」で「警戒」し「社会性」や「世間体」を意識して、心の壁のなかに閉じこもってしまう。



『留マッテハ・ナラナイ』。旅行をするというのは、いろんな経験をするが、一人旅などをすると、窮地に陥ったり、そこから何とか這い出したり、思い通りにならなかったり、文化の違いや言葉がうまく伝わらず苦しんだり、逆に気持ちが伝わり、一夜の楽しい宴になったりして、日常では経験しない体験をする。そしてたくましくなったり、ふてぶてしくなったりしてくる。森のライオンがいくら森の王様でも、一度も海原を見ないで死ぬのは、どこか哀れな感じがするように、生きているうちに、いろんな旅をすることは、大切なことだと思う。そうした旅を、楽器にもさせてみたという話。

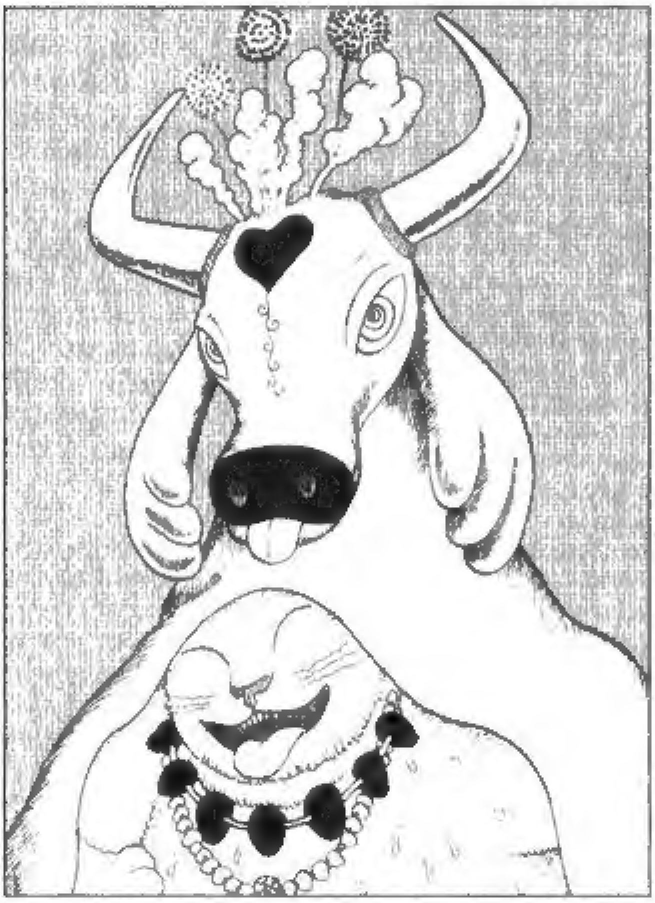
『空虚なスイカ』。スイカが輝く。僕の作品はなにかというと輝きだす。いったい何でこんなに輝きが起こるのか、自分でも判らない。暗い意識のなかに居ることが多いぶん、輝きに憧れるというのであれば、明るい意識に居すぎると、輝きの光度も妖しさも、解らなくなるのだ。



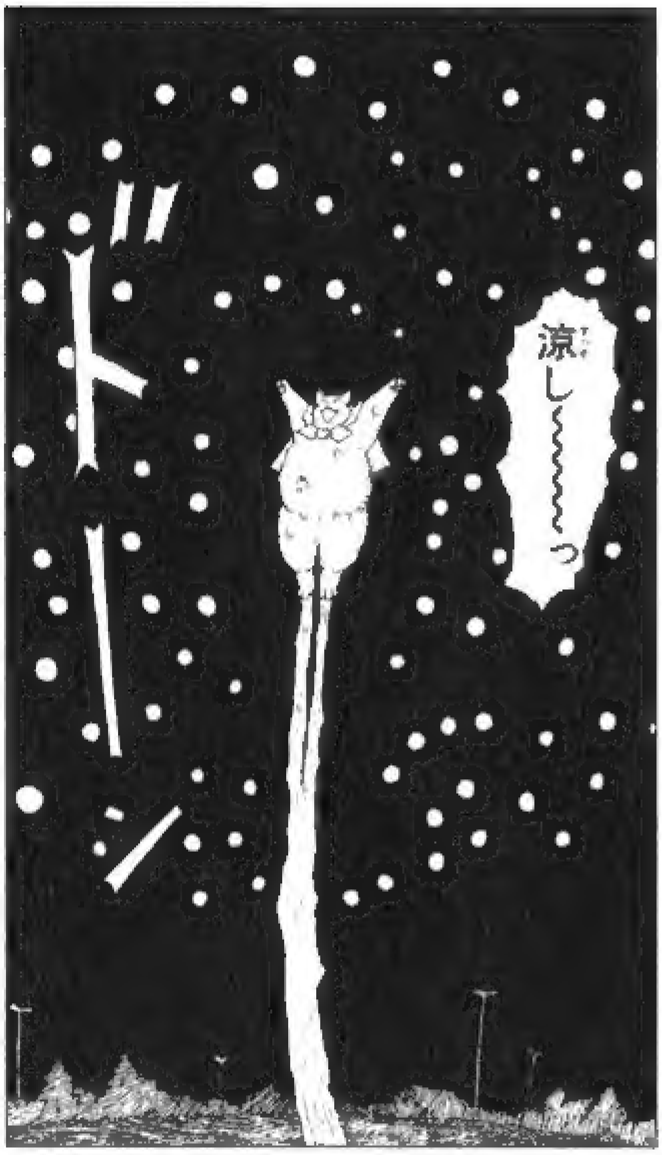
　ポンペイ展などの壁画を

見ると、描いた者たちが、まさかどえらい歳月を経て、日本まで来て誰かに見られるなどということを想像してはいなかっただろうに、と思いつつ、その壁画のなかに、描き手の「独特の気配」があったりすると、時も場所も越えて、伝わってくる波動に感動したりする。

『青い宝石』。アマゾンの河を下り、一日下っても河が終わらない風景の前で「海よりも広い河」を感じた。川べりのパリンチンスという小さな町で、三日間にわたり夜の九時から朝の三時までスタジアムのなかで繰り広げられる密林版のカーニバルを見た。ボイ・ブンパという牛祭り。聖なる牛を祭りつつ、先住民の文化と侵略者ポルトガルのキリスト文明のゴッタ煮のような祭典は、僕に「度が過ぎる」という意識の幅のどでかさを見せつけ、ここでも旅の恐ろしさと世界の深さを知った。この祭りに行くために、一日中、船のなかで見ていた雲たち。その雲の劇場の体験が、僕を蟹にしたのだ。



『ボイボイ弾』。ボイ・ブンパの祭りのショックは大きく、ボイボイ弾という花火になった。この祭りは町が青派と赤派に分かれ、スタジアムの応援席も2つに分かれ、自分たちの赤派のカーニバルの時は、一緒にテーマソングを合唱し、集団で手を振り座席に置かれた応援グッズを掲げる。二万人がロウソクの火を揺らし、ステージでは巨大な蟹や鳥が動き、その回りを先住民の踊り子たちが踊る風景は悪夢のように迫力があるのだが、そうしたシーンの頂点にさしかかるたび、花火が打ち上げられる。深夜の二時であろうが三時であろうが、ボハハハと炸裂し、「凄んげー、馬鹿じゃないのー、こいつらー」と呆れ返るのだが、三日目の最後に近くなった時、花火が炸裂しすぎて打ち上がらない花火まで引火して、とうとう客席に火が落ち始め、スタジアムの最上席は燃えだした。ところが満員の席で炸裂する花火のなか、それでも演奏も踊りも止まらない。爆発して客が逃げるなかでも、逃げ出さず踊り続けている沢山の人影



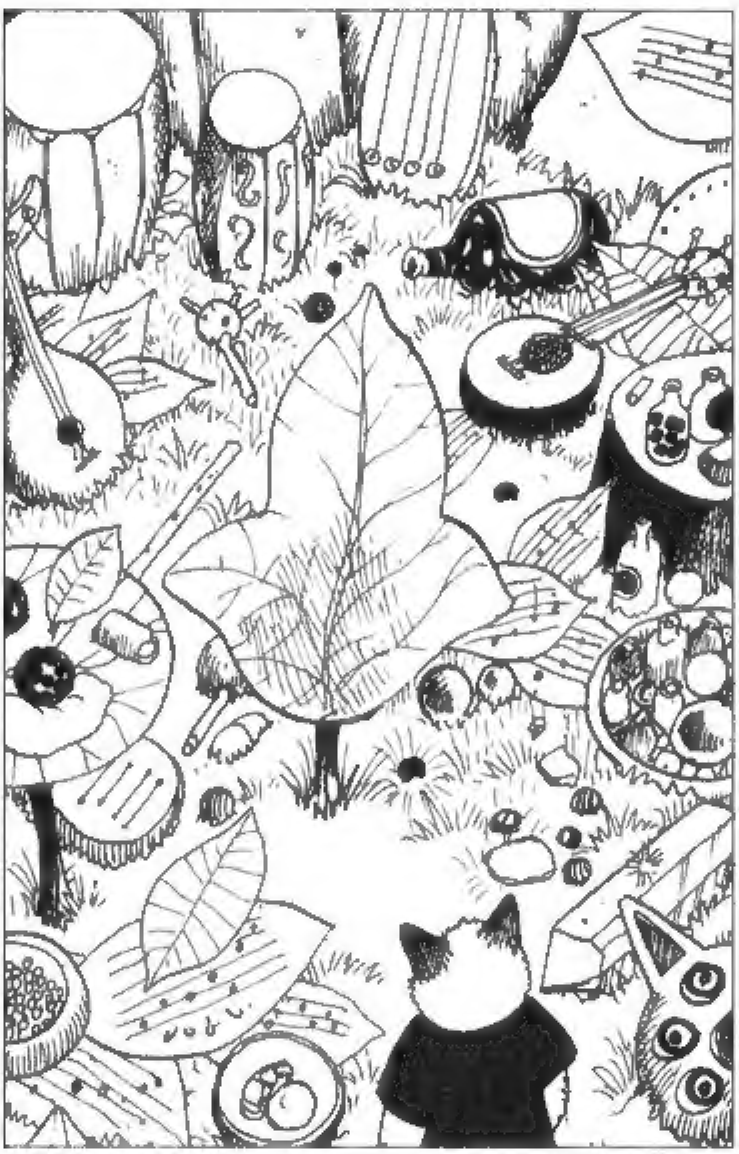
を見た瞬間、呆れ返りを通り越し、脱帽した。本気で踊るアマゾンの人々は、日本人が永久に到達しない馬鹿さ加減の深みで、楽々と踊っているのだ。

「ヒデヨシは、あのあと、どーなったのでしょうか。気になります」という質問があったりしたが、肉体は降りてもヒデヨシは本質的に、一生、空中で破裂し続けているのだ。

『嵐ノ中ニ居マス』。部屋のなかには、フットボール関係のもの。バッチ、ユニホーム。沢山の楽器。鉱物。読まない本。仕事場と遊び場がゴチャゴチャになり、物欲が嵐のように部屋の中で渦まいている。これが僕の脳味噌のなかなのだろうが、さすがに、整理してほんとうに何が大切なのかと、我が身に質問する気持ちが湧いてくる。収集癖には終わりがなく、整理能力がなく集めるだけの状態で収納ケースは大嵐のようだ。

　さて、この二千一年の夏、僕は宮沢賢治学会というところから、イーハトーブ賞というものをもらった。イーハトーブという言葉に感動した二十歳のアパートから、アタゴオルという言葉を浮かべた野田のアパートを通り、今、賢治が保坂嘉内に出した手紙の言葉だけが、水いろの通信として、僕の手元に届いている。

「化石シナイデクダサイ」。噛みしめて、行きます。



(初出) コミックフラッパー 2001年4月号～2001年11月号

MFコミックス フラッパーシリーズ

MFコミックス
アタゴオルは猫の森……………3

2001年12月31日 初版第1刷発行

著者……………ますむら・ひろし

発行人……………松岡博治

発行所……………株式会社メディアファクトリー
〒104-0061 東京都中央区銀座8-4-17
TEL 0570-002-001 03-5469-4760(編集)

印刷・製本……………大日本印刷株式会社

ISBN4-8401-0419-0 C9979